

ならば直に其職を辭せんと、恰も弊履を捨つるが如く忽ち之を辭す、爾來清之助大に武營が其地位の爲め説を變ぜざる硬直に服し更に株式取引所の理事長に推すに至れり。

高橋義雄佛畫に失敗す

高橋義雄書畫を愛して自ら斯道の通に居る、曰く『書畫は理想を表現したるもので其精緻の如何を窺ふには佛畫に若くものはないです』と、因て大に佛畫を蒐集し、千五百圓を投じて金岡筆と稱する虚空藏の一幅を購入す、以爲く滿城高襟の縉紳多く古畫を藏するも恐らく此畫に勝るもの無からんと、頻りに誇つて床の間に掲げ以て天狗の鼻をひこつかす、

下條正雄一見眞赤な贗物たるに驚いて義雄を顧みて曰く『君はまさかに之を買ひはしまいネ』と、義雄ギャフンと參つて顔色なし。

土居通夫攝津大掾を苦しむ

大阪商業會議所會頭土居通夫義太夫を攝津大掾に學んで坐に某妙咽に敬服す、以爲く此師百年の後誰か復たその妙を知るものあらんや、不如今にして太夫の義太夫數段を蓄音し置かんにはと、因て攝津に迫つて得意の義太夫を蓄音器に吹込ませんとす、然れども攝津はそれが大嫌なり、曾て天賞堂が六段三千圓の報酬を以て之



を促せども應ぜぬ程故、却々以てオイソレと承知しそらもなし、通夫こゝに於て自宅に蓄音器を装置し、壘を揚げ根太を刺し、室内九十度以上の温度を蓄へてお膳を据へて而うして攝津に懇請す、攝津義理にほだされ道に辭する能はずして終に義太夫六段を吹込む、曰く『どうもゑらひ目に逢ふた』と、氷嚢を頭に載せながら流汗淋漓、肩絹ビツシヨリ濡れてさながら燂て章魚の如し。

末松青萍銀行員に冷かさる

子爵末松靖萍先生伊勢に避寒して松阪某寺の佛幅に垂涎し、和尚に強請りて漸う二百五十圓で買取ることを約す、然れども青萍例の瓢然主義に

て囊中殆んど一物もなく、旅館山川ホテルの勘定また覺束なきの悲境に迫る、こゝに於て青萍築地の自邸に送金を求むれば、細君直ちに命を奉じて電報爲替を以て百五圓を送る、爲替は即ち十五銀行振出し百五銀行松阪支店の支拂なり、青萍大事成たりと喜んで早々松阪支店へ赴きたれども、南無三倉皇認印も實印も東京へ置忘れて、談判百方店員頑としてその支拂を峻拒するに困却し、進退谷つて額に汗して「男爵末松謙澄」の名刺を示し、尙且つ官線一等乗車券を見せて正しくその本人たるを示す、店員冷笑一番青萍を俯瞰して謂つて曰く『足下の末松さんと云ふとは能く知つてゐますが、店則ですから御印が無ければ支拂へません』と、青萍愈閉口し餘儀なく山川ホテルを證人に立て漸う大枚の金を受取る。

青山胤通大隈伯夫人を苦しむ

大隈伯爵嘗て病を醸して醫學博士青山胤通の治療を請く、胤通伯爵夫人を顧みて嚴戒すらく『伯は碁がお好きぢやが、一度に二番以上打たれては病のためによろしくない、これだけは夫人の御注意を願ふて置く』と、其後胤通往診し序を以て伯と碁を圍む、彼も亦下手の横好なり、一番好し、二番好し、三番四番局を重ねて殆んど底止する所を知らず、夫人大に心配して胤通に注意すらく「先生は伯に二番以上碁を打たせては不可ぬと仰しやつたのに、今日はモウ五六番續けられましたよ、先生が先達てそれでは明日から私が困ります」と、胤通キツクリ胸にこたへてキヨ

ロ／＼しながら故に平氣を装ふて曰く『よろしい、醫者が附いて居る時は大丈夫です』

宮部久赤毛布の性體を顯はす

東京染絨株式會社社長宮部久往年堀越善重郎と共に歐米漫遊の途に上る、以爲く邦人外遊の失敗往々紅毛の笑を貽す、畢竟不知案内の致す所、余今西洋の赤毛布たれども同行には外國通の善重郎あり、萬事彼を學ばゞ又以てしくじらざるを得べしと、乃ち心を強うして横濱解纜の外國船に搭ず、既にして夕食の食卓に就けども久一向其外國人の禮法を知らず、渠こゝに於て眼を善重郎の動作に注いで一々その爲る所を學ぶ、善重郎

に一癖あり、毎食麪包を半分残して挈つて而してコーヒーに浸して啜る、久麪包は斯うして食ふものかと心得、また其真似をなして、船中早く赤毛布の性體を顯す。

池田謙三お世辭の見當違ひ

日本貿易協會外務次官石井菊次郎、通商局長萩原守一の二人を迎へて親睦の宴を催し、池田謙三會を代表して起て、『外務省と貿易協會とは密着の關係があるので、是まで度々御招待申上げて誰方も兎角御缺席がちだが、今日は御多忙中にも拘らず兩君共に御列席下され、一同感謝に堪へませぬ』と述ぶるや、石井透さず起つて挨拶して曰く『前段は御同感

なれども後段は少々事實に相違の點あれば一言辯解して置かざるを得ない、即ち我々は常に諸君と會談したく思ひ居れども、お招きがないのに押かけもならずと差控へて居つた處、今日始めて御招待を被つて此席へ列なるの榮を得たので、毛頭諸君を疎外した覺はないのであります』と茲に於て道の謙三一本參つて少し消氣かへる。

河東田經清美人の眞意を悟る

河東田經清北海道拓殖銀行に理事富士製紙會社專務たるの時樺太視察に出かけて、眞岡港有志の歓迎を受け、同地の第一樓に招かれて非常の御馳走に與る、宴了つて二次會形の如く提議せられ、經清御多分に洩れず

して共に々々繰出せども、膳饗遙かに劣つて漫に第一樓のそれを思ひ、再び戻つて一汁二菜の晩飯をしたゝむ、會計を問へば大枚僅に七十餘錢甚だ不廉に非れども、しかも生憎紙入を忘れて、ツイソレ馬でも曳かざるを得ざるに至る曰く「氣の毒だが金を忘れて來たから拓殖銀行支店まで取りに越して貰ひたい」と、給仕の美人艶然微笑して「銀行支店などは存じません、マアそんな事は好いから御ゆるり遊んでゐらつしやいまし」と、夜更けて更に趣あるものゝ如し、經清乃ち大きに自惚て私に艶福の人たるを喜びウカ／＼御腰を据へてシガ一の二本も薫し了るや、忽ち袂に驀口あるを發見して「ヤ有つたく」と、直ちに勘定を拂へば美人はそれを受取つて打つてかはつて再び引留めもせず、經清こゝに於

て始て俗歌の欺かざるを知り慨然として美人の眞意を悟れりと申す。

添田壽一臺灣人の御馳走に辟易す

日本興業銀行總裁添田壽一先年臺灣銀行頭取を以て彼地に就職するや、土豪何某ために盛宴を開ひて壽一を招待す、由來臺灣の俗珍客を饗すれば主人自ら匙を舐めて肴を侑むを御馳走となす、壽一既にその汚さ如減を傳聞するが故に、心窃に閉口頓首して行つても決して物を食ふまいと決心し、内々サンドイツチを用意して之に赴く、四面瑩煌銀華翠帳に映じて玉卓既に備り、



主人客を迎へて金盤桂肴溢る、壽一こゝどと卓に對してジツト堪へて控へたれども、料理徒に並んでお世辭巧く行届かず、左顧右眴我を忘れて匙を執つて團子を掬はんと欲すれば團子轉々と轉げて危哉皿より飛出さんとす。最前から頭取の御様嫌如何と氣支ひたる主人機逸すべからずとなして、忙手ペロリと匙を舐めて團子を掬つて壽一の口邊に運ぶ、壽一アツしまつたと首を縮むれども事既に後れてまた如何ともすべからず、乃ち溢面してイヤ／＼口を開て最惠の御馳走に與る。

末延道成の惡戯

往年日本郵船會社の支店長會議を東京に開くや、神戸支店長心の解語の

花に奪はれて、梶を取りそこねて新橋の邊に沈没す、在神の家族百方引揚に苦心して悴の名を以て支店長に打電すらく「母病氣すぐ歸れ」と、偶末延道成其電文を瞥見して奇戯置くべしとなし、御苦勞さまにも支店長の名をもて返電して曰く「當地にも母あり歸れぬ」と、不知果して急所に當れりや否や。

久米良作語るに落ちる

久米良作は好箇の高襟紳士なり、一夕日本俱樂部の某會に臨む、座に福澤桃介あり瀟洒、諧謔の語を弄して自家宿痲の根治談を試み、以て江尻(駿州)某賣藥の提灯持をなす、良作案を拍つて覺えず絶叫して曰く「痲

疾々々！ 恐るべきは實に此痲疾である」と、因て黴菌潜伏の状を談じ、
諄々其影響する所を説いて外科醫をして後に瞠着たらしむるの道を示
す、聽者渠を凝視して啞然として隅へは置けない代物たるを解す。

諸戸清六大隈重信の一語に赤面す

勢州桑名の豪商諸戸清六先代嘗て大隈伯の郷里佐賀に歸らんとするを途
に迎へ、強て桑名の自宅に招待す、清六態ざく／＼岐阜提灯二十個を購ひ
來りて座敷の縁邊に掲げ、大に歡待の意を表す、偶々夜風吹き來りて其
一箇を地上に落す、清六思はず聲を發して「シマツタ五十錢損した」と、
言畢て大隈伯の面前なるに心付き直に他を言はんとせし一刹那大隈伯透

さず、「金持は違ふ子、中々勘定高いものだ」と、流石の清六も赤面し
て返すに辭なかりし。

岩原謙三能く踊り能く潜む

三井物産會社常務取締役岩原謙三往年入社倉々の一
青年を以て夙に活潑の聞えあり、一日階下に重役の
在らざるを狙ふて裾をからげてヤトコセを踊る、
手振り足踏み却々巧いものにて又池中のものに非る
を示す、憂々窺々階下忽ち音あつて重役益田孝の來
るに會す、謙三吃驚逃るに違あらず、咄嗟の間ヒラ



リ身を翻して壁に引つ附き蝙蝠よろしくの態をなして漸う見付からざるを得たり。

益田英作寒中池に飛び込む

益田英作新年早々兄孝を鴻沼の別墅に訪ふ、墅に新年旅行の數紳士在り、迎て而して好漢居くべしとなし、歌留多を執る「一番驕りつこて參らう？」と挑む、英作素歌留多の剛の者なり「よろしい」と應じて接戦數合、策を失つて連戦連敗、どうても大散財を爲さざる可からざるに至つて今更その馬鹿馬鹿しさを悟る、



然れども流石に芝の大佛なり、まさかに賽錢なしとも言ひ切れずして啞嗟に窮計を案じ、矢庭に衣服を脱ひて赤裸になり蹶然庭前の池へとび込んで氷を碎ひて突飛の藝道を演ず、満場何の真似たるを解せずして茫然その頓狂なるに吃驚すれば、英作漸う這ひ上つて「オゝ寒む」と慄るへ、倉皇衣服を着直して「さよなら」とも何とも言はず、皆ンなが呆然たるに乗じて、旨々東京へ逃歸る。

早川千吉郎紹介の正誤

先年一月日本俱樂部の新年宴會を催すや縉紳雲の如く來り會して西園寺侯またその中に在り、會幹早川千吉郎突と起ちて服部金太郎を首相に紹

川崎芳太郎圖らずも舊知に遇ふ

川崎芳太郎今こそ川崎正藏の養子となりて神戸の造船所を踏んまへたれども、昔少年時代は九州の一工人にして薩摩焼の繪師を業とし、錦江と號して微に皿小鉢の繪を描けり、渠嘗て要務を帯びて横濱に来るや川崎若旦那の威風四邊を拂ふて到る所下へも置かざる歡待を受く、既にして旅館林屋に投ずれば主人また鄭重に扱ひ、秘藏の茶器を出して手づから茶菓を侑む、見來れば茶碗蒼色を帯びて描く所の山水亦凡庸の筆に非ず、渠乃ち恍惚としてひねくり見るに晝尾錦江と歎して往年渠が職人時代の筆に成るもの、こゝに至つて流石の渠も無限の感に打たれ、手先慄へて

自ら茶の溢るゝを知らず。

神戸舉一山田英太郎の義氣に感ず

曩に舊日本鐵道機關車買入の事あるや、神戸舉一は同社に倉庫課長たるの故を以て諸方の攻撃する所となり、社中また目を注いで窃に疑を挾むものあるが如し、同社の庶務課長山田英太郎は快辯罵倒の長者なり、常に舉一と睦しからずして數々論争を事とす、是を以て舉一私に彼の攻撃せんことを恐れたれども、英太郎却て同情を表して極力舉一を辯護したり、其後舉一人に語つて曰く『山田は理窟ばかりコチクルから厭な男だと思つて居たが、此ぞ一番と云ふ時には全力を盡して助けて呉れる、

今度の彼が盡力は僕の爲めに百萬の援兵にも勝つた強味で、僕も始めて彼の義氣に富んでる事を解し得た』と、

大倉喜八郎折角の客を唸り飛ばす

大倉鶴彦夙に一中節を唸つて自ら隱藝の棟梁に居り、難曲「石橋」の如きもどうかかこぢ付けて頻りにし、とらでんを語る一夕渠其咽喉を誇らんと欲して數客を新橋花月樓に請待す、以爲く吾咽喉之を鳴らせば鬼神をして上下せしむ、吾絃は實に軒轅氏の律呂に合へり、假令音曲の解らぬ默然人と雖も恐らく



躍り上つて感心するならんと、乃ち息つぎのビールに聴かせ賃の膳部を運ばせ、私に釋尊對阿羅漢の説法を氣取つて、聽て唸り出せしは件のし、とらでんなり、専心一意首を振り口を曲め目を細くして流汗淋漓の間に一曲を唸り了れば、四邊寂寥、客も藝者も藻脱の殻にして、只蒼白さ電燈の月に擬ふて凄然膳の死骸を照せるのみ、鶴彦こゝに至つて呆然憤然手を鳴らして下婢を召べば、背後にと聲あつて半玉一人「何御用？」と叫ぶ、鶴彦僅に色を和らげて其背を撫て曰く「お前は餘程藝道に身を入れると見えて、能く一人で聽ひてゐたノウ」と、半玉腫臉を手の甲で摺つて欠伸して曰く「オヤ何か藝盡でもあつたの、妾はツイ睡つて些とも知らなかつたのよ』

添田壽一伊藤公にシテやらる

日本興業銀行總裁添田壽一先年滿韓を視察して京城に入るや時の統監伊藤公爵同地に在るを以て屢々訪問す、公の曰く『京城の官妓未だ語るに足らず、幸にして我に筑前琵琶の名手あり、以て激職の勞を慰す、吾子また靜聽して逆旅の塵耳を洗へ』と、因て幸する所の美人を召して今様一曲を奏せしむ、美人こゝに於ておづ／＼琵琶を取つて歌ひけらく「滄波道遠し思を渤海千里の雲に寄す、六宮苔白うして涙を韓山一庭の月に落す」と、嬌音凄愴滿堂恍として坐に寂光院の古を偲ぶ、公乃ち微笑一番忽ち筆を執つて何やら大書箋紙に書き、倉皇婢に命じて之を壁に張

出さしむ、曲止む、壽一何の氣もなくこれを望めば何ぞ圖らん文字は「進上、金一千圓也琵琶美人丈え添田壽一」と讀まれて始めて狐に魅されたるの思あり、然れども日本興業銀行總裁の肩書に對して今更知らん顔も出来ねば、澁々一千圓を出して匆々席を逃出す。

淺野總一郎自ら石炭屑を拾ふ

淺野總一郎は横濱の薪屋なり、一躍手に唾して大紳商となるも勤儉毫も昔日に異らず、渠のセメント工場を深川に建築するや、人夫數百騷然肩摩して以て築材を運ぶ、中に一人夫あり石炭を荷ふて誤つて數塊をこぼす、然れども之を拾はず、總一郎叱して曰く『百萬の富は鏹一文より成

る、一片の炭塊焉ぞ失ふべけんや」と、因て自ら拾ふて以て貯炭所に送る、群夫相顧て肅然、爾來石炭を粗末にせず。

坪井正五郎樺太にテリく坊主を遣す



理學博士坪井正五郎は博士界のチャキくにして而かも亦人類學者の大立物なり、渠新版圖極北の人類を研究せんと欲し、去夏鞭を擧げて樺太に向ふ、彼地に着するに及んで霖雨生憎に降り續き、濁水野に溢れて毎日宿屋の籠城を餘義なくせらる、正五郎こゝに於て紙を丸めて一箇のテリく坊主

をこしらへ、以て翌日の晴天を呪ふ、樺太の天地にテリく坊主のあれますは之を以て嚙矢となす。

小川鈍吉倫敦の怪物に驚く

日本郵船會社取締役小川鈍吉曾て英京倫敦に在り、一日用達に出かけて市街の壯麗なるを賞す、以爲く、英國人は規律的動物なり、家屋の端嚴人馬の正肅、列強殆んど其匹を見ず、倫敦の諺に言はずや「歪冠脱卸の人は紳士に非ず」又言はずや「靴の踵を地に着けて歩く人は懶惰漢なり」と、人々相警むる事此の如し、其世界第一の都市たるまた宜ならずや。と、因て橋欄に凭れて恍として其羨しさを羨む、乍見る矮小大足の怪物

ノソクサ道に當つて我を掠めて行過ぐるを、何者の痴漢と驚て熟視すれば是れなん大日本帝國從二位勳一等子爵長岡護美が大きな靴を左右轉倒に穿いて散策するにぞありける、鉦吉乃ち遽しく其肱を控へて聲を低らし「子爵！倫敦の市街を歩くには餘り不似合てせう、第一靴が左右轉倒てみつともないです」と、忠告すれば長岡莞爾笑つて己の靴を一瞥して曰く「ア、さうですか、併し大きい靴だから穿き違ひても大差なしぢや」と、平然穿直しもせずして悠々と去る。

磯村豊太郎碁會所に失敗す

三井物産會社倫敦支店長磯村豊太郎の東京に在るや碁を嗜んで策黨無双

の豪傑と稱せらる、一日淺草某所の宴會へ出かけて途中時刻の早過ぎたを心付き、一寸ら公園へ入つてブラ／＼油を賣れば、閑亭局を對して老翁鳥鷺を闘はす、磯村素より碁には目なく、我を忘れてノソク／＼そこへ入り込み、一局了つて「貴賓如何」と言はれるに及び、漸う亭の碁會所たるを知つて身腰を据へて「一番願はふ」と盤に向ふ、私に以爲く敵手の老爺位は苦もなくやつつけて呉れると、陽に遜辭を飾つて自ら平凡碁と稱すれば、敵手も平凡碁と稱して到頭擱んで一局を肇く、満田振はず互に珍子なくして結局磯村二十子の輸となる、然れども輸て熱するは碁の常なり「モウ一番」と追ひかけ行けば、老爺は笑つて「六目お置なさい」と言ふ、忌々しいが己を得ずして命に従へば今度は磯村石立たす、

再び九子置いて打つてかゝれば今度も黒石全滅して流石の磯村顔色なく、渠乃ち恐懼再拜無禮を謝して謹んで「先生はどなたですか、定めし聞えた名手で在らつしやらう」と尋ねれば、老爺は頭を撫で、答て曰く「イヤお耻しい、段級は漸う二段………只貴賓より少し強いだけです」

矢野二郎負傷中の諧謔

矢野二郎往年京都に遊んで落俣して肩骨を外す、蓋し大した怪我には非るなり、乃ち東都の實兄富永冬樹を驚かさんと欲して電報して曰く「ケンコツダツキウフクイ」と、冬樹再四熟讀して終に何の意味たるを解せず、憂苦之を問合せて始めて肩骨脱臼復位の棒音たるを知る、二郎笑つ

て人に語つて曰く「漢字は簡にして義深しと言ふが、その弊は先づこんなものだ」と。

馬越恭平石黒忠恵と柘前に問答す

馬越恭平矢野二郎の計に接して馳せて其家を見舞ふや、男爵石黒忠恵また松岡康毅と馬車を同うして來つて俱に供に一世の奇才を失へるを嘆ず、満堂寂として驟雨の到れるに異ならず、忠恵乃ち破顔一番恭平を顧みて「面白い先生を逝して残念千萬………餘の事ならお伴したいのだがね、馬越さん」と挑へば恭平透さず一矢を酬ひて「君の様な口の悪い人は速くお伴して行つて貰いたい子」と應戦す、忠恵何ぞそんなへ口矢に辟易

すべき、言下逆襲を試みて「茶の湯の禮式ぢやないがそんなら馬越さん
！何卒お先へ………」哄笑腹を捧げて柘前纒に眉を開く。

長谷川謹介掏兒に紙入を與ふ



工學博士長谷川謹介一日電車に乗つて悠々新聞を讀
ひ、忽ち見る一漢前に當つて去るに臨んでバツタリ
紙入を取落せしを、謹介深切に背後より呼止めて曰
く「モシ／＼貴下紙入が落ちました」と、彼則ち立
戻つて鳴謝幾番手早く之を拾つて、倉皇電車を飛下
りて去る、少焉つて謹介懐中の變挺古なるに心付き、百方搜索して南無

三摸掏奴にしてやられたるを悟る、叱して曰く「チヨツ忌々しい、先刻
の紙入は乃公のであつたかい、さう言へば彼奴が二三度ぶつかつた様だ」

掏兒渡邊雄男に欺かる

東京商工銀行専務渡邊雄男は當世名題の非高襟なり、常に粗服を纏ひて
市街を濶歩すれば、人皆砲兵工廠の職工と推測す、渠曩日新宿へ赴ひて
途にして一漢トンと衝突るに會す、氣が付いて胸間を探れば正眞無垢の
金側時計はおどくも掏兒に奪はれしなり、渠乃ち翻て窃に掏兒を追尾
すれば、掏兒はそれとも心付かず、人なき所に至つて時計を出して矯つ
透しつ眺め居たり、雄男こゝに於て後より掏兒の背を叩て低聲して曰く

「オイ戯行しちや不可へゼ」と、掏兒驚て振り向きながら「之れは失禮」と、直ちに時計を返して其場を逃去る、思ふに掏兒は雄男の粗服に鑑みて、恐らく仲間ならんと思惟せしなり。

島村久得意の舞曲

大阪鴻池銀行理事島村久は滅法多藝の男なり、舞曲に於ては殊に誇つて且那藝の大關と吹く、一夕渠愛妓富田屋ゆう子を拉して某樓に飲し、酒酣にして自ら起つて自慢の「鐘ヶ岬」を舞ふ、手振滑稽にして殆んど圖を成さず、靜坐拜見のゆう子、流石に辛抱しかねてクスリ、クスリ終に堪らず腹を捧げて絶倒す、久舞了つて怫然色を作して曰く「笑ふな己

ツ、乃公は舞が商賣でないぞ」と手に持つ手巾を投付けてブツブと怒つて去る、ゆう子漸く起き直つて獨語して曰く「オー切な、彼ア怒らはるから島村はんの藝はまだ上達るやろ。」

吉川重吉佛人に怒らる



貴族院議員男爵吉川重吉先年歐米に遊んで巴里の風光を探ぐる、工學博士藤岡市助、文學博士瀨川秀雄等三四のもの之が同行たり、一夕單身閑に乗じて出て、街巷に行吟し、城廓を俯迎して、往々去つて横町を曲れば、二漢翼々として數歩の前を行く、重

吉瞥見して誤つて同行の某々先を着けて夕涼を探ぐるとなし、倉皇馳せ寄ッて洋杖もて背後より其帽を叩く、而も同胞と見たは南無三佛人の間違ひ！怒髪帽を衝ひて、大喝以て重吉の無禮を責む、重吉乃はち閉口頓首して只管失敬を謝せども、佛人怒り益甚しくしてスンデに重吉を撲倒さんとす、危機一髪！偶々工學博士藤岡市助馬車を驅つて通行し遙に此状を望見し、直に馬首を廻らし砂塵を蹴つて殺倒す、佛人其銳鋒に辟易して風を食つて遁逃し、重吉纒に重圍を免る。

藤村義苗二十年にして狂歌一首を得

藤村義苗は遠州出身の一士族なり、初め露西亞語を修め、後高等商業に

入りて苦學幾年、業成つて聘せられて日鐵四十圓の月給取となる、渠や元と貧、當時纒に本郷に居して家に奴婢なく、細君赤兒を負つて襤褸を洗へば、義苗辨當を抱へてテク／＼日鐵に通ふ、雨の日風の夜いつても切通を通つて、仰ひて岩崎の壯郎を羨み、顧みて立ン坊門の腐甲斐なきに同情す、喝して曰く『我も人なり彼も人なり、僅に牆を隔つれば貧富何爲ぞ夫れ此の如きか』と、因て苦詠一番『岩崎の土手下に立つ立ン坊』と、上の句漸ら腰辨の狀を叙したるも感極つて下の句何の得る所もなし、其後渠日鐵を辭して櫻組に入り、品川白煉瓦會社に轉じ、終に萬歲生命保險會社の専務取締と爲つて、腰辨以來こゝに二十年を経れども、土手下の苦詠依然、尙ほ未だ完成を告げず、嘆じて曰く『乃公の述懐は到頭

立ン坊で終るかい』と、友人傍らに在り、爲めに下の句を附けて曰く、
それにつけても金の欲しさよ。
と、義苗案を拍つて心中始めて安し。

河村良平三才にして品行方正

河村良平は三井物産に於ける手腕家の一人なり、國手吉田健三の女を娶りて賀宴を帝國ホテルに張る、來賓演説例に依つてしこたま新郎新婦を喜ばす、辯護士某なるものあり、自ら竹馬の友と稱して、最後に起つて良平の昔を叙し、勵聲一番更に雄辯を振つて一咳して曰へらく『君三才にして穎悟、品行極めて方正』と、一座其言の奇なるに驚ひて呆然自失するや、隅に一快客あり、忽ち諧謔の語を投じて『然れども長じて漸く圓滿』と絶叫す、満堂噴飯、新婦赧然。

片倉兼太郎能く怒り能く笑ふ

片倉兼太郎は信州諏訪の大製糸家なり、頃日商用を帯びて東京に來り武州熊谷支店長櫻澤鶴吉の手脱のあるを怒つて電話へ召出して頭こなしに叱り飛ばして且つ曰く『明日上野發の二番汽車で熊谷を通過するから其時刻に必らず停車場へ出てゐる、窓口で面會する』と、鶴吉恐縮して退き下つて以爲く電話の小言が言ひ足りぬので明日復た汽車の窓から追加するのだらうと、翌日時を計つて停車場に待ち受ければ兼太郎果し

て窓に憑つて鶴吉を召び、小言どころか其手を握つて渠のよい所を賞揚し懇談分餘大笑一番雲に駕して去る、支店長呆氣に取られて人に語げて曰く『家の主人はこれだから嬉しくて耐へられぬ。』

古在由直便器を發明す



農學博士古在由直往年獨逸に留學して、途次過つて便所の無い汽車に乗る、駛行半日漸く尿を催して始めて氣が付いたれども事既に及ばず、左顧右盼窓からヒヨグラんと欲すれば白日面を照てし同乗目を注ぎ、押へて堪へんと欲すれば前途遼遠にしてズボンも將に破れんとす、

煩々悶々進退谷つて忽ち窮策を案出し、密に齎す所の絹帽を出して中へ新聞紙を入れ之を股間に挟み上をば毛布でかくして而うしてタラくその中へ放尿る、知不由直後の始末をどうしたらうか。

川崎正藏羽織を脱ひて鯛を直切る

川崎正藏遊船を瀬戸内海に浮べて珍客を招待し、行々快吟して一小港灣に至る、偶薄暮清風徐に來つて舉舟赤壁の遊を思ふ、正藏こゝに於て頸を反らして漁船を呼び、舷を叩ひて周魚の潑刺たるものを求む、漁夫足元を見て吹ひて曰く『鯛は不漁だから一枚一圓五十錢です』と、正藏憤然として怒り罵つて曰く『乃公が羽織を着てゐるからソナ事を言ふ』

んだろ、好し』と一番、言下羽織を脱ぎ去てそれを一圓に直切る。

川口武定轉禍爲福の即詠



前の陸軍總務長官中村雄次郎先年製鐵所長官に轉じて任に赴くの途次、辱知前の宮内次官川口武定を相州鵲沼の別墅に訪ふて宴を同地の吾妻館に開く、武定夫妻相携へて之に臨み献酬半夜に及び、肴核既に盡きて茶を召び飯を命ず、屬僚某なるものあり末社に加はつて周旋甚だ勉強、給仕に立たんと欲して誤つて飯櫃を轉覆す、嘆じて曰く『僕今長官に随つて赴仕の途に在り、過つた飲櫃を轉覆す、恐らくは半途食

祿に離るゝの凶兆ならん』と、因て愁然たるもの久し、武定微笑して慰めて曰く『吉言ふべからず、一寸マア斯うもあらうか』言下紙墨を呼んで狂調立所ろに成る

浪人の身の殊更に嬉しきは

めしかへさるゝ事にぞありける

満堂哄然某も亦漸く安し。

久米邦武法螺を吹き損ず

文學博士久米邦武米歐廻覽日誌の筆者を以て夙に法螺の隊長たり、其祭典古俗論を草するに及んで四面皆敵、漸く荏原の一隅に遁れて濫に筆を

弄せず、抱負を言辭に訴へて熾に來客を吹き飛ばす、一日客あり刺を通
じて面談を求む、邦武老眼朦朧瞥見して以て新聞記者となし、滔々政事
を上下して息をもつかせず之を追つ返す、客去る、邦武老眼鏡をかけて
名刺を視れば何ぞ圖らん之は是れ滿鐵社員何の某ならんとは、渠こゝに
於て老眼鏡を投げて絶叫して曰く「シマツタ、そんなら滿洲經營策でも
講じるだつて」

石本新六寫眞師を助く

陸軍次官石本新六口鬚雪を欺いて綠髮油々たるものあるに似ず、是を以
て渠の寫眞屋に赴くや窃にその班白の異様を憚つて、チヨツクリ鬚を染
めて而して後撮影す、寫眞到る子女相集つて緋展熟視して曰く「此寫眞
屋は大層上手ね、お父様のお鬚が黒く寫つてよ」と、新六襖越しに聞
いてにやり。

小川鉞吉法會に戸惑ひす

小川鉞吉先輩吉川泰次郎の忌日に會し、例に依つて
午前九時から菩提所駒込吉祥寺に詣る、堂に昇れば、
磬鐘已に報じて僧侶讀經方に酣なり、鉞吉心窃
に後れたるを耻ぢて隅に扣へて讀經の終るを待つ、
顧みれば滿堂の施主皆知らぬ顔にて三菱知名の連中



只の一人もなし、鉛吉變に思つて極りわるく仔細を問へば變も道理、
目指す法會は午後へ廻りて之れは或る他の供養なりけり。

穂積陳重五十人に命名す

法學博士穂積陳重同腹七子を擧げて皆健全なり、外舅澁澤榮一嘗て子女
の夭折するもの多きを憂ひて一子の命名を陳重に求め、以て漸く無事な
るを得爾來命名は博士の擔任となれり、こゝに於て陳重子育地藏の株を
奪つて無闇矢鱈に人の子の命名を頼まれ、其數實に五十人の多きに及ぶ
往年米國聖路博覽會へ出かけし時の如きも今の大阪ホテルの支配人大
塚卯三郎より小兒の命名を頼まるゝに至る、陳重曰く「亞米利加くんた

りまで来て命名親に爲らうとは豈夫に思はなかつた、マア斯うして置か
う」と、因て之を聖太郎と命名けて聖路の紀念物を利かす。

大島久滿次巡査に恐縮す

前臺灣民政長官大島久滿次島内旅行の際一日某所に於て同行者に語て曰
く「君向ふを見給へ彼は島民の婦人ぢや、裙影風に搖ひて玉肌氷骨を欺
く所は一寸異だらう、ヤ此方のは不可ん墨色淋漓頸節撓まずと云ふ墨畫
の孟宗竹よろしくぢや」などと、傍若無人の批評を試みて洪笑一番頻に
以て愉快とす、今まで窮屈相に護衛してゐた土人の巡査漸う之に氣をゆ
るして日本語巧に馴々しく話しかくれば、大島ギョツとして俄に口を押

ゆれども及ばず、お前は日本語知つて居るのか、何故今迄黙つて居たか。

井上辰九郎滿洲の看板に閉口す

渺茫一目雲山吳越を分つべからざるは滿清の野なり、日本興業銀行理事
法學博士井上辰九郎戦後の籌策を抱ひて此地を巡察するや黍夢千里苗々
馬を没して人煙殆んど絶す、渠乃ち私に喜んで理想の以て大に試むべき
を解し、漸く進んで一小村落に到れば商家點々店に當つて異様の看板を
掲ぐ、讀みもて行くに曰く「燒鍋局」曰く「上々白面」と因て又以爲く燒鍋
局とは無論鍋釜製造所にして、上々白面とは必ず美人の巢窟ならん、何
も研究視察の役目と、蹶然勇氣を奮つてそこへ飛込めば何ぞ圖らん燒鍋

局には鍋なくして少年燒酎を商ひ、上々白面には美人影を止めずして壯
丁幾人面を白うして米利堅粉を嚮げるならんとは。

木村桑市老博士の勵精に感泣す

木村桑市一度志を失して清國漫遊と出かけ、英氣を養つて歸つて而し
て興業仲介所の設立に盡瘁す、初め渠の快々として樂まざるや偶々一新
聞紙あり報じて曰ふ「文學博士根本通明夙に易學に名あるも自分は尙未
足れりとせず、高齡古稀を過ぎて八十八才、毎旦冷水を浴びて斯學の蘊
奥を究めんと期す云々」桑市讀下一番忽ち聲を放つて泣く、喝して曰く
「此老人にして尙ほ且つ此勇氣あり、我輩何ぞグス／＼して可ならんや」

と、こゝに至つて奮躍以て仲介所の設立に従事すと云ふ。

高橋是清カラワグラの落首に避易す



高橋是清曾て農商務の吏たり、偶々一米人の秘魯鑛山カラワグラの利を説くに會し榎本武揚外數名の賛成を得官を去て其採掘に従はんことを思ふ、到れば則ち死鑛分厘の收むべきなく、遠方御苦勞千里の航海徒勞に屬してお茶でも飲れと云ふ者もなし、悄然として歸朝するや一通の郵書到る、之を披けばカラワグラ逆に讀めば倉空

落首一片何處ともなく舞ひ來つて是清の空財布を掠めしは當らずと雖も唐辛の味噲づけ、口を吹ひて避易したる是清の不器量今も傳へて談柄となる。

横井時雄船中涕泣の裏面

横井時雄往年米國に航して始めて太平洋を経、茫渺大洋觸視無く、暴風窓を吹き怒濤舷を洗ふ所、靜に史を繙て卓に甕れるは天晴の時雄、時あつて滂沱たるは抑又何の涙ぞ、疑らくは是れ那翁ヲートルローの末路を讀んで悲むならんと、友人交怪んで背より覗へば何ぞ圖らん渠は密に細君の寫真と對して歔歔して泣けるならんとは噴嚏——波の音に比べて

微細至極の一聲も頭上百雷の思をなして時雄顔色なし。

山川勇木童顔の遇不遇

山川勇木は横濱正金銀行取締兼總支配人の多らものなり、當年五十六才なれども一寸見若うして世辭を除いて慥に四十と見られるなり、禿頭白髮世の染髮毛生の藥に親む先生誰かは其幸福を羨まざらんや、往年渠正金銀行倫敦支店長を以て彼地に在勤するや、次席は胡麻鹽頭の一老人にして渠との釣合さながら父子も雷ならず、由來英國は染髮藥の販賣地に非ずして白髮禿頭大に巾を利かせる尊老帝國なり、是を以て始めて同店に来れる白人往々誤つて先づ年長次席者を音問し却て勇木の支店長た

るに氣が付かざりしと云ふ、今渠尊若帝國に歸つて頗る適頭の人となる、其得意また思ふべき也。

桐島像一官妓を見残ふ

某年某月三菱銀行地所部長桐島像一岩崎久彌に隨つて韓國漫遊の途に上る、舫窓月明にして水波興らず、滿眼渺茫漫に赤壁の遊を思ふて美人を天の一方に望む、乃ち莞爾として獨り懷ふ韓國は日本海頭の美人脈なり、京城幾百の官妓は熒々として秋天の星の如く、裊々嬌々歌へば鬼神を泣かせ、舞へば武夫をも酔はす、彼の萬頃の黍稷夫れ將た何かあらんや、此行嬉しきは専ら官妓の拜見に在りと、釜山に着き京城に到つ

て只管幸便を待てども、久彌森嚴真面目にして嘗て官妓のかの字だも言はず、失望落膽像一心空しく腐ちて到頭官妓を見残ふ。

西村天囚の謡曲近隣の家賃を引下ぐ

西村天囚自ら遙曲通と稱して鞍馬派の張本たり、満坂の烏天狗木葉天狗等朝暮其門に伺候して滅多矢鱈に呻りのめせば、無慘又無慘、隣傍鍋は割れ糠味噲は腐れて、婦人は頭痛を醸し、小兒は虫を發す、こゝに於て井戸端會議は諸所に開けて遙曲禁壓の方法を講じたれども、結局長いものには卷



かれよの軟派多數を占めて、甲去り乙行き遂に我から尻を端折つて他へ轉ずるもの多く、お蔭と家賃は低落し來つて家主も亦頭痛のお相伴を蒙る某者曰く『家賃を下落んと欲せば天囚をして輾轉僑居せしむるに若かず』と、大坂の家主聞て而して恐慌す。

高村光雲京都に失敗す

帝室技藝員高村光雲東京美術學校教授に任ぜらるゝの初め、校長奈良行を促して天平時代の彫刻を視察せしめ、日數を十日と定めて旅費雜費合計百十一圓を給す、當時光雲は貧乏揚句の新進奏任なり、十日の視察を終つて旅費其半を費すに過ぎず、剩餘を返さんと欲して大に正直を賞せ

されたり、後數年渠復奈良行を命ぜられて、「旅費は出がけに學校から受
 取れ」と、言付らる光雲乃ち前回の味を占めて忽ち贅澤になり、直さま
 後藤貞行を尋ねて同行を勧め、「二人の旅費は大丈夫だから明朝十時に新
 橋で落合へ」と約す、而して翌日學校から渡された旅費は僅々四十餘圓
 是れ規定の改正ありたるに由る、光雲こゝに於て大に閉口したれど今更
 後藤を斷られもせず、詮方なしに知己から百圓を借りて辛じて奈良に行
 き歸つて京都に到れば此時既に學校出の美術家多勢在つて、迎へて而し
 て散々驕らせられ、囊中空乏を告げて到頭宿屋の勘定に差支へる、嘆じ
 て曰く「美術家も少しく世間を知つてゐねば困る」と漸う宅から金を取
 寄せて東京へ逃げ歸る。

新渡戸稻造掏兒の親分と間違らる



一 高校長農法學博士新渡戸稻造先年三縣學務の視察
 を命ぜられ、單身東海鐵道に駕して越中に向ふ、長
 途夢結ばず掛川に至つて一寸下車して紺屋町の山口
 旅館に投じ、荷物を預けて直ちに向の理髮床へ行く
 曰く「コレ〜一つ鬚を剃つて呉れんか」 偶亭主
 在らず女房そこへ出て「今親方が居ないから剃れません」と、斷る稻造素
 と旅なれて剃刀頗る器用なり「そんなら之を貸せ」と手づから剃刀を執
 つてゾリ〜鬚を剃る、幾くもなく亭主醉友某を伴ふて歸り、窃に此軀

を憤つて剃刀の損料三十錢を要求す、稻造應ぜず揭示の定價鬚剃四錢を拂つてスタ／＼旅館へ歸る、亭主等こゝに於て益々小癩に障り、追尾旅館の帳場に到つて稻造を罵つて掏摸の親分と呼び、終に巡查を拉し來つて其身元を糺さしむ、館頭彌次馬の山鳴つて噴火の如し、既にして委細判り巡查醉漢尻尾を卷て去る、稻造笑つて曰く『ア、馬鹿な目に會つた、こんな事なら早く博士を振り廻せば好かつた』

久米良作骨相家に避易す

東京瓦斯會社專務取締役久米良作一日山田英太郎等と田中熊藏をして己の骨相を判ぜしむ、熊藏は知名の骨相家なり、靜に良作の頭髓を撫廻して

一考して謂つて曰く『骨相の自白する所に依ると足下は貯蓄心が旺盛で
そして……色情機關が大に發達してござる』と、英太郎膝を拍つて『悉
皆的中つた』と叫べば良作英太郎を睨めてニヤリ。

安田善次郎の茶代

天京本店は越後柏崎の一等旅館なり、去歲盛夏一老翁の來つて投宿する者あり、瞥見するに衣服は精々新て買つて一圓ばかりの白地の紵に、へ
コ帯を締めて、書生下駄の一足三十錢程なるを突かけたり、曰く『どうぞ宿を頼みます』と、主管その古風の言分から割出して田舎の肥桶爺の濱見物と推測し、下女に言付け下々の一室に案内させて以て大に柏崎ホ

テルの權式を示す、少焉あつて旅館隨一の顧客と知られたる日本石油會社社長内藤久寛等來つて『安田善次郎君に面會したい』と言ふ、主管訝り且つ怪んで曰く『へい、さういふお客様は當店にお泊りがござりませぬ』『イヤ通知があつて來たのだから泊られぬ筈はない、能く調べて貰ひたす』『へい、』、畏りましたが安田善次郎様と仰しやるのは安田銀行様で……へい、そんな立派なお方は……』『い、』から一々客に問ひて呉れいと下女を拉して相共に座敷を探し廻り、遂に件の老翁を見付けて『ヤコ、』だく』下女を顧みて『ナゼこんな粗畧な扱をする、柏崎の耻辱になると主管にさう言へ』と叱して席を移さんとすれば、善次郎遽しく之を止めて『ナニ此室でも構はぬ用さへ足りれば夫で可いちやないか』と終て安田が勤儉に驚く。

諸戸清六代附の飯を擴張す

夜此むさ苦しい室に談し、翌旦宿賃を拂ひ茶代五十錢を置いて去る、人以て安田が勤儉に驚く。

故諸戸清六性急にして食事の長びかん事を恐れ、居常膳に二碗の飯を備へて代を盛る間も空く過さざらん事を力む、是れ清六名題の代附なり、旅館に於ても亦そのお代附の膳を要求す、某館の下婢頭痛鉢巻して呟ひて曰く『諸戸さんも可いけれど、お代附の御飯で口喧しいから厭だわ』之を贅する朋婢聲を低ふして曰く『夫に纏頭が各汚てるので恐れる子』とサ。

瀬戸口宗明の賞泣

瀬戸口宗明は薩摩隼入の一人にして一見武骨の木強漢なれども、しかも中心熱涙を湛へて數々世の輕薄者流を愧死せしむ、某人一日渠と會して談偶々横濱選舉の事に及ぶ曰く『島田三郎の苦心と憤慨とは實に夥しいことで、彼が横濱の或劇場で政見發表の演説をした時、過去現在に於ける彼と横濱との關係を反覆し了り、更に一吹の音吐を高うして、余の經歷既に此の如く、而して選舉人諸君より未だ嘗て一片の忠告をだに受たるとなし、諸君の信賴を擔ふて立て耻ざるは神明の照し給ふ所、諸君も必らず余を棄てざらん、而して今や強敵舟中に顯はれ、合同結托多數の力を

を合せて俄に余を排斥せんと欲す、嗚呼余は力微にしてこゝに倒るゝも元より倒るゝの理由あつて倒るゝに非ずして多數の暴力を以て強て倒るゝもの也、余は只諸君と共に憤慨以て之を他日の政史に訴ふる所あらば足るなり云々と、述べて覺えず熱涙ポロ／＼と溢した、スルト満堂活氣が立つて一聲に「島田君萬歲」と叫んだが其聲實に天地も崩るゝ許りであつた、彼の當選は全く此瞬時に確定したのである』と物語れば宗明また感に打たれて玉の涙はポロ／＼その鬚面に濺ぐ。

服部金太郎幼時の心懸

日本一の賞賛を得たる時計商王服部金太郎、幼時日本橋上楨町の龜田某

に雇はれて丁稚小僧たり、數入の日主人砂糖袋一箇を與へて慰諭して曰く「宿入の土産に之をやるから兩親を喜ばせてやれ」と、金太郎辭して曰く「宅は貧乏だから砂糖を貰つても煮て食ふものを買ふのが厄介です萬望澤庵の香物と取換て下さい」と、主人感服して歎じて曰く「此小僧他日大に爲すあるべし」と果然今日の成功を見るに至れり。

若尾幾造叔父逸平に叱らる

若尾幾造横濱蠶絲銀行の破綻を生ずるに當つて窃に其責を免れんと欲し辯護士某の説を容れて早くも尻を端折らんとす、若尾逸平聞て而して怒り罵つて曰く「此馬鹿野郎、貴様の信用が金に代へられると思ふか、五萬や十萬の金はキリ／＼出して片を付けて仕舞へ、法津なんかは裏店浪人のひねくるものだと云ふを知らないか」と、幾造赤面して漸う踏止り、遂に行務を挽回するを得たり。

仙石貢北陸の紳商を震懾せしむ

工學博士仙石貢曾て東京府の技師長たり、聘せられて北陸鐵道の設計に従事し、加越の縉紳に會して事を謀る、然れども彼等優柔數々前説を翻して貢の設計を妨ぐ、貢怒禁ずる能はず卒然一紳商を捕へて之に問て曰く「君乞ふ舌を吐て余に見せ、余は私に其舌の二枚ならんを疑ふ」と紳商赧然、爲めに震懾せりと云ふ。

豊川良平劉備傳を讀ませて祈禱に代ふ

豊川良平亡叔岩崎彌太郎を學んで往々どえらい藝當を演ず、聞説彌太郎事務に追はれて氣屈すれば座を正うして論語を朗讀し、馬上に通鑑を緇ひて市街熱鬧の間を逍遙すと、是を以て良平また通鑑を愛讀し、人をしめて爲めにその珍柄なるを絶驚せしむ、良平嘗て病を得て平養月を亘る、醫の曰く『乞ふ君諸事を抛て静臥せよ、否ざれば危し』と、醫去る良平蹶起書生を召んで資治通鑑を枕頭に運ばせ之をして幾回か劉備傳の一節を朗讀せしむ、看護者某諫めて曰く『お醫者は懇々静臥を勧められき、而して今破鍋聲の朗讀を求められしは何ぞや』と、良平笑て曰く『劉備屢

々生死の間に出入して死せず、終に天下を三分して漢の社稷を有つ、余命あらばまた劉備の如くならん』と、蓋し其實渠も心細いから徐に彌太郎の昔を思出し、劉備傳を讀ませて以て窃に其身の祈禱となしたるなり。

高木三郎机上の寶物

佛家に如意寶珠なるものあり、之を仰げば七珍萬寶意の如く降下し來ると云ふ、横濱同伸社長高木三郎亦一寶珠を藏して常に同社の机上に鎮す、曰く『之は是れ我家の如意寶珠なり、之を搖せば心氣爽快米錢意の如く生ず』と、見來れば渠の寶珠は菊正宗の四合罎、何さま事務の消長は一に此寶珠の有無に關す、給仕の小僧しやれて曰く『同伸社の社長は罎の

中に在らつじやいます』と、而して彼れ今や九泉の下に在り。

田村太兵衛鬚の辨解

村田太兵衛嘗て大阪市長となるや口鬚を生して紳士社會の一笑話を醸し、花柳また傳へて小歌の材料となす、而して太兵衛卒然竊に親善する所の美人に謂て曰く『今やから言ふが、皆がゑらう笑はしやる此鬚は私の爲めには眞固に忠義者やテ、事實言ふと、私の上唇は他の三層倍も厚うて、鏡見るとさいが自分から愛相が盡きよつた、乃て三日三夜寝ずに工風してゐいやつと鬚を生したのやさかい、他が何言ふても私は毛頭剃る積はありやへん、どうぢやい鬚の無い時附喰はした和嬢も今やと歡迎るやないか』と笑ひかくれば、美人怖い皆で睨んでビシヤリ太兵衛の背を拍て喝して曰く『市長はん貴郎本氣どすか』

岡部長職北海道に持てる

大盡は大盡を氣取り大臣は大臣を振り廻はす、由來大臣の北海道を巡視する者その元老と子爵たるを問はず概ね大臣風を吹かせて往々高く止まる、法相岡部長職は大臣にして又大名華族たり、先頃北海道巡視の豫報あるや道人みなお荷物となして御前殿様のやんごとなきを頭痛とす而して長職愈々來つて道人の歡迎會に臨むや、百事平民主義にして酒を召び妓を呼び肉山先づ崩れて謝詞疾く太平樂と化し、席を離れて盃を取つ

て熾んに逆襲を試み、道人こゝに於て喜んで相語げて曰く『こんな氣樂な大臣は開闢以來お目にかゝつたことがない』と、仍て大に長職をもてはやす。

朝吹英二チンチクリンの名言

朝吹英二鐘紡經營の縁故を以て頗る綿花の講釋に長ず、曰く『チンチクリンの綿は其質好良なり』曰く『紡績事業とチンチクリンとは密接離る可からざる關係を有す』と、邦俗チンチクリンは矮小漢の異名なるを以て聞く者一種の矮小植物となす、何ぞ知らん英二の所謂チンチクリンは印度有名の綿産地チンチクリンの間違ひならんとは。

梅浦精一翁飴に閉口す

梅浦精一上越電氣會社の重役會に臨んで高田の旅館柳糸郷に投じ、名物翁飴を舐つて來客と談す、諤々諄々語熱せんと欲して頓挫黙々口を噤んて恰も啞者の如し客怪んで之を見れば捧腹絶倒精一大事の義齒を飴に奪はれて閉口一番、内證て頻に應急手當に汲々たらんとは。

岩原謙三堀越善重郎を諷す

三井物産會社理事岩原謙三嚮に實業團に加はつて渡米せんとするに當り、心竊に細君同道の面倒臭きを厭ひて様子を見れば、濫澤、堀越の先輩

皆お茶瓶附の洋流を學ぶ、而して友人等皆な謙三にも頻りに妻君携帶を
勸む、謙三忽ち遠攻近攻の一計を案じて堀越善重郎を訪ひ、言を巧にし
て謂つて曰く「日本の事なれぬ婦人を西洋に連れて行くと洵に始末が悪
い、どうかして濫澤男の夫人同道を廢めさせたいものだ」と、遠く味方
を得て以て堀越にも細君を置去りにせしめんと企つ、然れども善重郎一
向感せず、ウンともスンとも謂はずして謙三折角の計略畫餅に屬す。

三木善八泥棒と間違へらる

三木善八報知新聞經營者を以て斯界に鳴る、一日同社の寫眞銅版製版部
に人なき時ノソソくそこらを物色す、已にして新來の技手外より歸り、

其三木たるを察せずして一喝して曰く「咄汝何者ぞ、近頃本部も物の紛
失すること多し、汝恐くは泥棒ならん」と、善八敢て争はず、退いて人
に語つて曰く「僕もいろくな目に出會つたが部下から泥棒呼はりをさ
れたは之れが嚆矢だ」と、技手傳へ聞いて茫然。

杉山茂丸八百の井に狼狽す

杉山茂丸客歲朝鮮に遊んで伊藤統監を訪問す、偶お出入の道具屋朝鮮青
磁の一鉢を齎し、効能百萬陀羅を並べて以て頻りにお買上を願へども、
統監「高價からう」と微笑して買ふとも買はぬとも言はず、茂丸こゝぞ一
番驚かし所と靜に道具屋を顧み「御前が御不用なら私が買ふから旅宿へ

届けよ」と澄し込み天晴れ以て自ら仕出來したりと爲す、既にして茂丸旅宿へ歸り、道具屋の書付「青磁鉢一箇代金八百圓」とあるを見るに及んで吃驚仰天滅法其高價なるに辟易したるも、今更斷る譯にも行かず、乃ち周章狼狽自宅へ電報を發して遙かに金の送達を待つその電信の名文に曰くドンブリバチカツタカ子ハビヤクヲクレ。

森村市左衛門能く部下を賞む

森村市左衛門客と對して談部下に及べば必ず口を極めて其長所を賞賛す、曰く、甲は算術が達者で長年間ツイニ一度も違算のあつた例が無ひ、曰く、乙は雜貨の鑑定が上手で彼が目を通した品に粗雜のものは一つもな

い、曰く、丙は流行を測るに長じて彼の見込んで仕入れた品は決して賣り損つた事がない、曰く何、曰く何……到底私の及ぶ所ではないと、以て往々部下其者の面前でも賞散す、しかも其の言は些のいやみたらしからずして全く誠心誠意に出でざるはなし、渠が貿易界に覇を稱するの所以亦自から此に存するものあるを知らん。

大江卓其子を勵ます

大江卓の男某實業に志して大に計劃する所あり、父に訴へて容易に其資本を得んと欲す、卓色を作して曰く「實業は身を利し國家を益するを目的とす、計劃若し宜を得て其人信あらんか、資本家之を助くること蟻の

甘きに就くが如し、親子は情に脆し、由來實業の友たるに利あらず、汝金玉の志あらば去つて他山の石に就け、岩崎後藤の叔父さん皆共に謀るに足れり、居ながら親の脚を嚙つて袖手して金を儲けんと欲するは、抑も亦大間違の極ならずや」と、男俯伏して語なし、只膏汗の背に湧くを知る。

市島徳次郎の孝心

日本有数の大地主にして且つ舊家なる越後の市島徳次郎は、父静月（即ち先代徳次郎）の存生中、是非父の寫眞を遺さんとを望みしも、寫眞を撮れば身の影が薄くなるとまで言ひ傳へられた當時のたとて、静月は非常

な寫眞嫌ひで、百方懇請するも承知せず、依て徳次郎私かに自ら寫眞術を學び、研究數年ヤット一人前の寫眞を撮ることを得るや、再び父に向けて數年間苦心の次第を述べ、「兒親しく撮影の技を執るべければ」と懇請したり、流石の静月も徳次郎の孝心の深さに感じて、遂にその請を許せり。

早川千吉郎老母に孝なり

早川千吉郎母に事へて随分孝なり、一面外交に力めて狹斜の巷に出沒し、時に暗淡燈下に「お客やア」の艶辭を浴せられるも、三更月を踏んで歸つて而して必ず宅に眠り、毎朝母に向つて『お早う』の一言を呈するを以て家憲となす、孟子嘔吐の曹子を評して「親に事ふる曹子の如きものは

可なり」となす、或人評して曰く千吉郎は夫れ曹孟の徒か。

浅野總一郎立志の由來

(火吹竹にて頭を擲らる)

浅野總一郎は越中の國手某が三男なり、初め同國一農家の養子と爲つて窃に米商の利あるを思ひ、自ら米を北海道に積出して不熟の商業に失敗す、養父乃ち大に怒りて火吹竹を取つて總一郎を亂打す、渠こゝに於て奮然志を立て、東都に上り遂に實業界の驍將となる。



大谷嘉兵衛先祖を大切にす



大谷嘉兵衛は篤實温厚の君子なり、毎朝佛壇に向つて先祖を拜するに非れば、いかなる急用にも手を着けず、渠常に曰く『いか程立派な紳士でも、先祖の祀を疎にする人は親しく交際へない、私は縁談の世話をする時、必らず先づ其菩提所へ參詣してみる、若し先祖の石塔に草が生へたり、位牌が毀れてゐたりすれば、此縁談は初めから破潰すに如くはない』と以て渠がいかに道義に厚きかを窺ふに足らん。

河上謹一と加藤高明の譽め合ひ



河上謹一と加藤高明とは大學時代よりの友達なり、共に明敏にして達識、當世得易からざるの材なり、謹一の曾て日本銀行に入りしは高明が川田小一郎に薦めたるに因る、謹一常に高明を評して曰く加藤は頭腦冷清明快にして而かも果斷決行に富む外交官として當時比ぶべき者なしと、高明は亦謹一を評して曰く河上は腦裏透徹能く大勢を達觀し、措畫甚だ宜しきを得、實業大家なるの資質を具備せりと、互に口を極めて譽め合ふ、聽く者皆其友誼の

厚さに感じ、且つ處世の道に適へるを賞す。

乃木希典華族學校を坊主にす



將軍虜を討つて還る、征士未だ劍を解かずして華胄既に咸陽を夢む、大將乃木希典臂肉揚るに違あらずして入て學習院長となる、出仕の初め幾多紅顏の生徒を引見して潸然として涙下る、嘆じて曰く『藩屏徒に美にして脆きこと瓦の如く、父祖は國に殉じ子孫は修飾に耽る、殷鑑遠きに非ず、咄何者の子弟か、髪を伸べ香水を塗つて婦女子の盪に倣ふ』と、因て滿校の生徒を喝して悉く五分刈頭と

爲す、聞く者爲めに感激す。

後藤新平舊恩を忘れず

故阿川光祐は後藤新平の第一恩人なり、其初め職を水澤縣に奉ずるや後藤を頑童中に發見して之に學資を給し、醫學を勧め終に當時の安場愛知縣知事に介して渠が半生を成立せしむ客臘光祐の淺草に永眠するや、新平方に羈旅に在り、計に接して、倉皇千里を遠しとせずして來つて其喪に服し、自ら二千餘金を投じて葬儀の莊嚴ならんとを期し、光祐子なきを以て、長男一藏、實弟彦七の二人に命じて徒步して靈位を捧げて柩に扈從せしむ、會葬幾百の男女等しく感泣して新年の高義を仰ぐ。

前島密恩賜を避く

赤脚官山に攀ぢ縦横策をついて遞信次官に進む、奉仕多年、密や恩給に近づき議合はずして卒如として冠を掛く、上長慰諭して言へらく『モウ三ヶ月辛抱なさい、さうすると恩給が戴けるから』密の曰く『御厚意は辱けないですが、私もまだ恩給で生活す程老衰しません』と、斷然民間に下つて實業の空氣を吸ふ。

安田善次郎太平記を手寫す

安田善次郎性來剛情にして一旦思ひ出た事は必ず貫かずんば已まざる人

なり、壯時讀史に耽つて最も大平記を愛す、然れども囊裏未だ之を購ふの資を剩さず、是に於て渠奮然貸本を借りて以て之を筆寫するの意あり、孤燈明滅の下、連宵之を手寫して年を重ねて遂に三十余卷を完成す、聞く者皆善次郎の根氣に感ず。

田尻稻次郎奇警後進を誨ゆ

法學博士子爵田尻稻次郎常に大學後進の士を導ひて各適當の實務に従はしむ、其中の一人來り訴へて曰く『お蔭で麴包には有り付きたれども社長支配人等眼なくして我輩の動き振りを見て呉れない』と、稻次郎一喝大呼して誡めて曰く『人の己を知らざるを憂ひずで、銘々自分の職務さ

へ勵んでゐれば夫てよいのぢや、部下の働さを見て呉れぬのは、見ない人の罪だ、他人の罪まで心配して耐るものか』と、其人稽首して謝す。

九鬼隆一彫刻師に回まざる

九鬼隆一曩に博物館長の椅子を占めて今も尙ほ美術の鑑識に富むを傳へらる、聖路易博覽會の開くるに當つて彫刻家某一箇の佛像を刻んで之を出品せんと欲す、隆一一見して頻りに盲評を逞うすらく『彫刻は可いが姿勢が不可ん』曰く『こんな力瘤は餘り仰山ぢやないか』曰く『日本の彫刻家は寫生の頭腦が乏しいから困る』と、以て大に意匠の拙劣なるを攻撃す、某傍に在つて憤慨措く能はず、忽ち長太息して呼んで曰く『吁

嗟呼、これが不可ぬと仰やるなら、盲人讀書の置物でも製作て出させう」と、隆一顧みて愕然復顔色の拜まるべきものなし。

馬越恭平は御馳走上手也

馬越恭平先年大日本麥酒會社を代表して三井物産各支店長を赤阪の三河屋に御馳走す、時正に盛夏賓客汗を忍んで盛装して行く、恭平愛相よく出迎へて「マア暑いからお風呂へと、下婢に命して浴室へ導かしむ、來賓喜んで浴を了ればそこには各自の名を附したる風呂敷包あつて中には白地の浴衣に羽二重の帯を藏め、之を着れば大小區々の驅躰にビタリと合つて五分でも透さぬ詔向の寸法なり、來賓ハテナと不思議に思つて快

飲數刻酔眼朧々として浴衣の儘家に歸れば自分の洋服は先刻の風呂敷へ包まれて腕車の中に置かれしを見る、こゝに於ていづれも恭平の用意周到なるに感じ、更に行長適合の次第を尋ねれば何ぞ圖らん之れは是れ恭平豫め三越呉服店に質して來賓各自の衣長に縫はせしなりと、聞く者益恭平の御馳走上手に驚く。

大隈伯山本權兵衛の強情に感ず

大隈伯開國五十年史編纂の總裁として専門家の原稿を悉く檢閲す、前の海軍大臣山本權兵衛また與つて海軍史の一部を編述す、而して大隈は博覽強記の先輩なり、每稿意見を加へて彫琢甚だ力め、博士の名文と雖も

毫も假す所なし、權兵衛赫として怒り且つ曰く『余人は知らず拙者の草稿は一字一句の修正を許さない、若し此條件が氣に入らなければ草稿を返して貰はう』と、頑固に構へて萬方すれども可かず、伯乃ち膝を打つて嘆稱して曰く『道に山本は自信が強いから感心ぢや』

鎌田三之助墨西哥の鰐に驚く

鎌田三之助先頃墨西哥に遊んで其風物に眷戀し、數々杖を曳ひて山川水澤を跋渉す、一日澤畔を過ぎて大鰐長二間餘なるが巨口開て道に當れるを見る、三之助吃驚仰天食はれては大變と一目散に逃げ戻り、之を通辯に語れば曰く『それは驚かれるも道理ですが、鰐は自分に害を加へぬ貴客を食はうとするのではない、彼れは齒の間へ蟲が湧くといつてもあゝして口を開けて居るのです、スルと鳥が來て其虫を拾つて食ふのです』と、三之助呆れ返つて暫く語なし。

矢野恒太漸う溜飲を下ど

矢野恒太は第一生命相互保險會社の事務取締役にして頗る誠實の男なり、日露戰役後起業熱の激昇して瓢乎々々株式會社の勃興するに當り、渠は平然沈黙して何等の新事業にも手を出さず親切なる友人數々來り動して曰く『君も餘り正直過るよ、此千歳一遇の時機に權利株の三千や五千持たぬと云ふがあるものか』と、因て諸友の頻りに儲ける鹽梅を語る、當

時は實に株で儲かつた時代なり、恒太と雖も固より知らざるに非ず、然れども渠は頑固に峻拒して斷じて投機に一指を染めず、既にして形勢一變諸株暴落して曩の株に得意なる者、損失頻々顔色土の如くなるに至るや、恒太得々投機の恐るべきを談じグープ一番胸撫下して「ア、之で漸う溜飲が下つた」

豊川良平岩崎久彌に感服するものメて三ツ

岩崎久彌海外留學中謹嚴學に勉めて怠らざれども亦窃に道樂なき能はず、曰く演劇、曰く銃獵、三座の代目には屹々と出かけ、獵期には犬を率て深山幽谷に跋躡す月を追ふて道樂益々甚しく殆んど内外人の指目する所

となれども、劇に於ては大に悟る所あり、嘆じて曰く「歐米の劇敢て趣味あるに非ず、然れども俳優能く品性を慎んで人をして覺えず敬意を表せしむ、日本一の團菊惜むらくは其踵にも追付かず」と、是を以て歸朝後斷然觀劇を廢して専ら樂を銃獵に恣にす、偶々弟某伊豆に狩して誤て同行の大學生を銃殺す、久彌聞て而して直ちに獵銃獵犬の價數百千圓なるを擧げて知人に投與し、以て多年の道樂を絶つ、豊川良平こゝに至つて感々服々して曰く「余交遊多しと雖も一旦其非を改めて己に克つ速なる久彌の如きを見ず、彼は天晴三菱の本尊たるに耻ぢず、嗚呼彼が劇、獵二道樂を廢したる銳斷は余の遠く及ばざる所なり」と、某人傍に在り、言を挾んで曰く「久彌容姿秀麗にして而かも色を好まず、花怨

み柳妬んで窃に彼を木強漢と呼ぶ、此一事夫子に於て如何」と、良平頭を搔て微笑を洩して曰く「之も余の遙に及ばざる所、シテみると感服がべて三ツになつた哩』

末延道成梅若實に擲掄せらる

末延道成謠曲に於て下手の横好と稱せらるゝも御當人一向そこにお氣が付かれず、一日師匠梅若實を召んで鞍馬の一曲を呻つて自ら鼻を高しとなす、問ふて曰く「只今のは何處が不可かつたてせうか」と、實お臍で茶沸して曰く「ウフン近頃無理な御質問で御答辯に苦みます、同じくば何處が可つたらうかと御質問下さればお世辭にも一ト節位は彼處かと御答

せませうに」と、道成面に汗して語なし、下女を願て「未だ御酒の支度が出来ぬか」

中野徳二郎坑夫に扮して恩人を禮す

高雄炭礦は筑前三大礦の一にして年々巨額の石炭を産すと云ふ、山主中野徳二郎は昔は同山の坑夫、毎日鶴嘴を手にして坑内に労働したるも一朝奇運來會して今日の榮あるを致したり、渠常に曰く「余の今日あるは偏に松本潜君の眷顧に因れり」と、則ち其本を忘れざらんと欲し、毎歲元旦には必らず坑夫の山衣を着して恩人潜の家を禮す、識者渠が成功の偶然ならざるを解す。

千葉勝五郎の最後

千葉勝五郎信濃の古着行商より起つて東都屈指の金満家となり、財産優に四百萬圓と號す、彼れ病に罹りて終に起つ能はざるを察し、自ら遺言状を作る、瞑する日親類立會ふて之を閱すれば當主財産二百萬圓を殘すの外、悉く之を親族故舊に分配す、聞く者渠が平日の吝嗇を憶ふて轉た意外の感をなす。

大倉喜八郎佛像蒐集の本旨

大倉喜八郎宅地に美術館を築きて東洋の美を誇らんと欲し、内外の紳士

を迎へて頻りに其作法を評論す、中に佛像千二百體あり日本、支那、朝鮮、暹羅、印度、西藏等の尤を勝つて陳列せるものと號し、氣焰萬丈悠悠之と對して自ら得たりとなす、某人問ふて曰く「君は一體どういふ了簡でこんな佛像を集めたのです？」大倉微笑して答て曰く「佛は男性でも女性でもない、其れに柔和と嚴肅と之に對へば不平も憤慨も無くなつて仕舞ふからサ」と、其言艶曲自然に崇佛の意を表して趣味また多饒。

根岸練次郎通がつて失敗る

日本郵船會社倫敦支店長根岸練次郎夙に倫敦通を以て名あり、一日巴里の友人結婚披露の宴を催して態々案内状を越す練次郎以爲く佛蘭西は世

界第一の美術國なり、好し余一番此處へ出かけ、通の通たるを示さんと、乃ちフロツクコートの左胸に華美なる花を翳して行く、門に入てキヨロはなく、内證で聞けば巴里の風俗結婚披露には必らず燕尾服と相場が一はなく、定てゐると云ふ、こゝに於て折角の倫敦通は鑑三文の價値もなく周章狼狽知人の燕尾服を借着して漸く其日のお茶を濁す。

岩崎彌之助村井弦齋を羨む

岩崎彌之助實業三國の一を有つて金づくの望殆んど達し得ざるはなし、村井弦齋一日渠を尋ねて實業界の品性養成家庭改良の氣焰を吐く、彌之

助長太息して曰く「僕また實業界の風紀紊亂を憂へて之を救濟せんと欲するや久し矣、而して未だ能はず、君今市井に伍して閑窓一夢、筆を八域に運らして自在に人心を上下す、假令事成らざるも亦以て自ら慰むるに足らん」と、因て大に弦齋者流の境遇を羨む。

柳生一義倫敦に捕虜となる

臺灣銀行頭取柳生一義は濃厚老實の長者なり、先般英京倫敦に遊んで足をベッセル街に入る、妖美輕羅を纏ひて白壁窓下の懇遇妻妾藝妓も管ならざるものあり、一義こゝに於て恍として瑤池に遊ぶの想をなし、流連歸るを忘るゝもの一週日、知人傳へて一義倫敦に捕虜となると稱す。

梅浦精一の粗忽

梅浦精一倫敦の珈琲店に入て休息數分、勘定一圓を拂ふて去て財囊を探れば出がけに入れ置た十圓金貨は影も形もなし、南無三之は珈琲店て間違つて渡したり、謂なく占領られては日本商人の面目が立ぬと、直さま取つて返して嚴談に及べば店主は平然受取つたは慥に一圓ですと勿付けて一向相手にならず、精一ボン／＼腹を立て大に英國商人の悖徳を罵り、床を蹴立て歸り、之を濫澤榮一に語り、既に夜なり蓐に就かんと欲して上着を脱げば曩に火面を暴した十圓金貨はチャリンポケットから轉げ落ちて爛々床上に光る、榮一冷笑して曰く『珈琲店の主人は今頃反對に

君の言ふたことを繰返して日本人の不徳を攻撃してゐるだらう』と、精一恐入て顔色なし。

萩原源太郎古禪の棄場に窮す

萩原源太郎越中禪三十筋を貯へ、濫澤榮一に隨ふて歐米漫遊の途に上る、蓋し禪丈は洗濯を厭ふて一々かけ流しにするの胸算なればなり、倫敦滯在中汚れた禪數本に及んで殆んどその置所に困しむ、則ち出でて之を棄らんと欲すれども、市街清光電燈晝を欺きて小ツ耻かしくて之を處分するの機會なし、然れ共古禪は臭氣愈々高まつて



或は同行に厭がられるの虞あり、こゝに於て渠は必死の勇を振ひ揮數多新聞紙に包んでテームス河畔に擔ぎ出し、夜半人靜まるを待てドブリ河中に投込て亡ぐ。

小野友二郎禿頭隱蔽策を誤る

落語に「逆螢」なるものあり、蓋し語の意は螢は尻光るも頭光るを以てなり、三井銀行監査役小野友二郎は名題の禿頭にして落語の所謂逆螢も嘗ならず、嘗て五六の友人と益田孝を叩き又故中上川彦二郎の宅を見舞ふて平素の無沙汰を謝す、中上川未亡人曰く『誠にお珍しいから紀念の爲めに皆さんの寫眞をとり度うございます』と、言下息某を召びて撮影

準備に汲々たり、友二郎私にハットおもへらく、夜前益田の宅で聞た逆螢の落語はその場限だから好かつたが、寫眞に取つて長く保存されては誠に以て堪つた話でなしと、乃ち一策を案じ謙遜を装ふて態と横向にイ立て撮影を了り、以て孔明正成も及ばざるの計畧となす、何ぞ知らん渠の禿頭は前より横が甚しくして寫眞を檢すれば惘然一箇のびんづる尊者ならんとは。

加藤正義青雲の發端

加藤正義鳥取出身を以て夙に山形縣の屬官たり、時の縣令三島通庸と意合はず斷然職を辭して去つて神戸に到れば囊中空乏を告げて剩す所僅々

二錢のみ、偶鳥根縣書記官某なるものあり正義の窮を憐んで勸めて判任六等の縣屬たらしめんと欲す、正義固辭して曰く『鳥根は我が隣縣なり男兒碌々小吏と爲つて耻を隣傍に暴さんや』と、某其言を奇として更に勸めて兵庫縣屬に推薦す、時の縣令森岡昌純また正義の才能を愛し其職を辭するに及び正義を携へて俱に共に共同運輸會社に入る、正義今日の青雲實に之に因するなり。

前島密圍碁を廢したる由來

前島密初め碁を嗜みて對局十番夜を徹して倦まざるはよけれど、遂に縁無し衆生が策的一輩の上に出づること能はず、一日遂に決然として、叱

して曰く『手談元と閑散の技のみ寸陰輕んずべからず丈夫豈之れに溺れて事務を廢するの愚を學ばんや』と。斷然嗜好を翻へして碁盤のこの字も言はず、人以て密が行動の一佳事となす、頃日密大隈伯に會して談偶圍碁の事に及ぶ、伯問ふて曰く『足下元と碁狂の名あり、一朝之を廢して復た顧みざるは何ぞや』と、密こゝに於て始めて本音を吐ひて曰く『實は敗けると心持が悪くて堪らぬから、思ひ切つて廢めて仕舞つたんです』と、聞く者噴飯始めて渠の與し易きを知

牟田口惡口を叩て禮を陳べらる

牟田口元學會で太政官に書記官たり、議論風發惡口屢々奇禍を買ふ、一

日伊藤博文と閑談す、伊藤卒爾として問ふて曰く、足下小野梓を以て如何のとなすか、牟田口直に答へて曰く『在様半官半民とは彼の事でしょう、官吏として如何にも眞面目ならず、民黨としては餘りに官吏臭し』と、伊藤、後之を小野に語る、小野聞て牟田口に向て謝して曰く『半官半民評し得て誠に當れり、足下は余の知己なり』と、牟田口大笑して曰く『乃公は悪口で随分悪まれて居るが悪口叩いて禮を言はれたのは今度が初めてだ。』

加藤正義一度死す

加藤正義、山形縣屬を辭して流寓多年、金風徒に吹ひて雁信消息を傳

へず、こゝに於て郷里鳥取の役場は渠を死せりと速了し、戸籍簿整理の序を以て「明治九年以後死亡」の八字を朱書したりき、焉んぞ知らん渠は其實ピン／＼して雄飛の準備を爲しつゝあらんとは。明治十三年に至つて渠始めて頭角を露はす、役場狼狽終に朱書を取消して渠を復活す。

林權助軍機大臣を擲楯す

林權助曾て清國に公使たり、一夕時の軍機大臣那桐の邸に招かれて非常の御馳走に與り、將に辭去せんとするに方つて、通譯亭主の意を傳へて復た能く留つて飲まんことを以てす、權助偽り酔ふて管を卷いて曰く『モウ不可んよ、不可んがネ奥さんが出て引き止る御親切があるなら今一献

過ぎさう」と、清國由來夫人の客に接せざるを以て禮とす、通譯こゝに於て大に困つて到頭好い加減に取りなす。

池田謙三熟知の女將を見残ふ

川崎八右衛門自宅に宴を催して朝野の縉紳を會す、池田謙三また招かれて其席に在り、忽ち見る粉黛明眉の白襟紋附、趨走應對、進退頗る度に適ひて天晴貴顯の奥方らしき美人あるを、謙三則ちすこてれにてれて身を固くして左様然らばの外行言を使ふ、美人嬌笑一番纖手を飛ばして謙三の膝を抓つて曰く「マア憎らしい、大層お澄して居らつしやるよ」と、謙三毒氣をぬかれて飛び上つて熟視すれば美人は是れ渠が行きつけの待

合の女將！「燈臺下暗さにも程の有つたもの、池田君は近頃近眼になられた」とは満堂知人の冷語にして、道斯道の大博士もこゝに至つて大に其器量を下ぐ。

仲小路廉小切手を知らず

仲小路廉檢事のバリ／＼より進んで遞信次官となる、其初め京釜鐵道の理事として朝鮮京城に赴くや大江卓が金員支拂ひに銀行小切手を用るを見て怪んでその譯を問ふ、卓また怪んで諄々その譯を説く、仲小路妙な顔して「其れては此小切手を渡せば現金と同様ですネー」と今更らの如く驚く。

村上彰一酒癖家を嫌ふ

臺灣鐵道顧問村上彰一は有名なる酒癖家なり、途に麴車に會ふてならま
だしも好いが、居常酒のさの字でも聞かうものなら忽ち百事を放擲して
涎の流れて幾千丈たるを知らず、然れども彼は不思議に酒癖家を嫌つて
日鐵貨物係長たりし當時に在ては幾十の部下は悉く甘黨にして酒を飲む
者只の一人もなかりき、某人怪しんで故を問へば彼は笑つて答へて曰く
『乃公の酒は死ななくちや止まぬ、若し酒友を慕ふて左家を集めん乎乃
公の擔當部は終に何事をもなす能はざらん、是乃公が酒癖家を毛虫より
も嫌ふ所以なり』と、成程蟲の好い工風と謂ふべし。

後藤新平一老爺の温情に泣く

後藤新平初め醫を以て出て、名古屋の病院長となる、歳入數千圓知る者
その全盛を羨む、而して新平心快々として樂まず、嘆じて曰く『人病あ
れば醫をして之を療せしむ、憾むらくは天下未だ醫の病を治すものあら
ざるを』と、蹶起院長を辭し去つて官海に投じ、衛生局長と爲つて熾
に内地の醫病を治し、累進臺灣民政局長に至つて終に政治家中の健兒
となり、南滿鐵道の總裁を経て今や遞信大臣になつて天下の耳目を惹く、
彼れ郷里に歸つて盛んに歓迎を受け連日馳走攻めに遇ふ、一夕一老爺の
彼を旅館に訪ふあり、風呂敷包みを披きながら鼻をすすつて曰く『お前

さんはエライ人にならしやるとは思つたがこんなにお大名にならるゝとは恐れ入つたもんだ、家の婆々は三日前から餅を搗て待つて居たが、堅くなつたと云ふので今日又搗き直して持つて來ました」と言ふ、新平其温情に感激して覺えず涙を流すこと數行。

寺田甚與茂八錢の辨當代を徴收す

岸和田紡績會社々長寺田甚與茂謹儉を以て名あり、曾て同社に重役會議を開きたれども正午を過ぎて食事の手當なく、午後二時に及んで始めて腹塞げの辨當を願つ、重役總に飢を凌ぎ議事を了つて歸へらんとすれば、甚與茂「暫らく」と呼び止めて書付を示して曰く「今日の辨當は一本が八

錢づゝです、各位何卒辨當代を拂つて下さい」と、終に其錢を取立て、アバよと訣別す。

平沼專藏義兄を賣る

平沼專藏往年谷元道之の人物を見込んで、伯爵黒田清隆を介して兄弟盃を其邸になす、道之得意になつて以爲く、乃公強藩より出て、馬術を以て漸う知られたれども、今や元勳黒田の御前を後見として、又金満家平沼專藏を弟分となす、何を爲すとしてか成らざるを憂へんと、因て東京馬車鐵道會社を興して自ら其社長となる、專藏また其全盛を喜んで、爲めに多額の資金を貸付け以て大に東京馬車鐵の活動を助く、然れども

當時馬車鐵實收面白からずして、株券頓に下落す、ここに於て專藏竊に
谷元の前途を推測し、厳しく貸金の督促を始めて、谷元をして復た世に
立つ能はざらしめたり、聞く者慳蹙して專藏義兄を賣ると爲す。

吉村鐵之助頗る君子の風あり

吉村鐵工場主吉村鐵之助先年事業熱の昇昂するに當り友人の勧誘に従ひ
一千萬圓の資本を募つて東亞紡績會社の設立を計劃す、斯の業は水運の
便を必要とするを以て先づ數萬坪を小名木川附近に相して手金五千圓を
打つ、而うして財界一轉形勢不況に傾ひて會社は終に不成に歸し、手金
流れて全然損失に終るも吉村毫も怨言なく、その後該敷地の東京瓦斯會

社は買收されたるを聞きて喜んで人に語つて曰く「彼の地所は多數の地
主を糾合して作つたのだから、後が心配であつたが、夫でも地主へ迷惑
のかゝらなかつたは何より喜ばしい」と、因て大に瓦斯會社の買收を徳
とす、聞く者以て君子の風あるを稱す。

市島謙吉汽車賃借用の裏面

市島謙吉往年一日飄々として去つて神奈川の某旗亭に上る、酒膽海の如
く風雲口角を離れ、奔濤天を突いて李白を笑ひ樽次を嘲る、已にして瓶
子倒れ殺核盡き、蹒跚下婢を召んで腕車を命じ、陶然劉玄石を夢みて疾
驅して横濱に向ふ、呼んで曰く「車夫止まれ！」と、只ツた一枚剝す所

の十圓紙幣を出して煙草五十錢を買へども、田舎の小賣店チヨツクリ鉤
錢が間に合はず、亭主狼狽四邊八軒奔走する内、謙吉前後を忘れて「鉤
錢は要らぬ、車夫行けッ」と、其儘去つて横濱の知己を訪ふ、閑談數刻
酒醒め懷中を探して始めて九圓五十錢の鉤錢を放棄したるに心付き、俄
に塞ぎ込んでさまりわるく、醉餘の失策を白狀し、汽車賃借用に及んで
命から〜東京に歸る。

岩下清周稀代の借用證文を書く

北濱銀行頭取岩下清周曾て三井銀行に在り、偶々地方巡廻の役目を帯び
て勇んで其途に上りたれども、歸行て其跡を調べれば嬉し紛れの旅行は

いつしか四五人前の入費を遣ふて上役木村正幹の激怒する所となり、終
に借用證文を入れて漸う始末を付ける事となる、而して清周の書いた證
文の文句に曰く「前書の金額借用候處確實也但し返濟の見込は無之候」
と、こゝに至つて正幹は眞赤に爲つて怒り、清周は白い齒を出して笑ふ。

小川一眞ボーイと爲つて苦學す

小川一眞曾て米國へ渡つて寫眞術を研究し、竊に望をコロタイプの將來
に屬して切りに之を學ばんと欲し、一大寫眞師を紐育に叩きて百方教を
請ひたれども、寫眞師惜んで之を教へず、曰く「足下がさう執心なら三
年の間私の所へ來てボーイをおしなさい、さうしたなら教へて進やう」と、

心こころ私ひにかに謝絶しゃぜつの好辭柄かうじへいとなすものゝ如し、而して一眞の一心は之式これしきの事に屈くつすべきにあらざ、直ちに其家に住み込み、刻苦精勵三年ボーイと爲つて更に他を顧みず、此に於て主人其熱心を感じて終にコロタイプを教ゆ。

榊順次郎禿頭の申開き



醫學博士榊順次郎は日獨兩國の修學にして産科婦人科の大家なり、患者早朝より踵を接し、病院亦入院する者多く杏林皆其全盛を羨まぬ者なし、一日新橋の紅裙こうくんおはねなるもの來て診察を乞ふ、おはねつゝ順次郎の頭を眺め漬飯一番四邊を憚らずして問

ふて曰く「先生はまだお若いのにどうしてそんなに御頭が禿たのです？」と、順次郎ぬからず答へて曰く「之れか子之れは伯林に居た時彼地の美人にペロリ舐められたからだ」と、満堂の貴婦人爲に病苦を忘れて頤を解く。

前川彌助精神治療に成功す

病は多く精神の軟弱なるに發る、勝海舟曾て虎烈刺病に罹り惡瀉半日にして十有三回に及ぶ、海舟怒て曰く「世に勝安房とも言はれる英雄がコレラ如きに敗けて堪るものか」と、力を全身に籠めて柱を擁はしらきて病に抵抗すること終日終に藥を用ゐずして平癒し得たるは、世に勝の精神治療と稱して頗る高名の一事たり、京都の實業家前川彌助は日本橋堀留前川

太郎兵衛の實兄なり初め京都に住居て金巾を商ひ僅々十數年にして巨萬の富を致せりと云ふ、嘗て彌助病ありて萬方すれども治せず、醫師また匙を投じて空しく死を待つに似たり、然れ共彌助精神自若毫も生命に阿らず、枕頭謠曲を謠はして以て私に天國に遊ぶの思をなす、是に於て渠の心氣は益々沈着し、旬日ならずして病自然に癒る。

和田維四郎等輕業師と間違へらる

和田維四郎、鶴原定吉、故平岡浩太郎、白石直治等相携へて海外を漫遊し、之て米國ヅールズ市に到る、ヅールズは世界第一の鐵材集散地なり、是を以て一行其狀況を審にせんと欲し、通辯寫眞師案内者等を隨へ同

勢べて十人、大行李數箇を馬車に挽かせて悠々然として一大旅館に投ず、館の手代窓に以爲くハ、一お出た日本の輕業師奴等がと、冷々導ひて下等の一室に押込んだり、維四郎等怒り叱して曰く、『こんな穢苦しい所では不可ん、上等の室へ案内しろ』と、然れ共手代等笑つて應ぜず、無慘絶東帝國の大々紳士は行商一輩の徒と伍して哀れ一夜を下等の一室に明かしたり、平明館に集る米紳數輩あり、刺を通じて日本製鐵所長官和田君に謁せんと乞ふ、見來れば是れ同館熟知の新聞記者なれども手代等尙ほ未だ解せず、既にして同地方有名のマンタ、アイロン會社の副社長馬車を軋らせ來つて恭しく一行を迎ふ、こゝに於て手代等始めて和田等の輕業師ならざるを知り、俄に上等室へ導ひて前來の無禮を謝す。

前島密栃鎮の苦言に窮す

栃鎮田中正造一日前島密に見えて曰く『貴聳さんの高田早苗殿が早稻田大學の隆盛と共に大層評判が好く爲らしやつたが其に就けても高田殿のお蔭を蒙りたがる者は先づ舅御の貴公を尋ねて御世辭を並べ滅多矢鱈に聳殿を賞めてかゝるに相違無い、此奴一番御用心ものでがんす』と、前島苦笑して他を言ふ。

仙石貢の道樂

仙石貢は工學博士中の大膽剛直なる者なり、嘗て九鐵の社長となるや妻

子を東京に残して單身門司に留寓す、人あり怪んで問ふて曰く『人生の娛樂は家庭の團樂たるに在り、不知吾子何の樂あつて齷齪するや』と、貢笑て答て曰く『乃公の樂は第一が相撲、第二が讀書て、第三は些と言ひ難し』と、聞く渠が年々購入する所の内外書籍は金に積つて約二千圓と云ふ、然もその書は政治文學社會の三種に止つて肝腎の工學書類は一冊も無し。

飯田新七公德の敗類を嘆ず

京都の機業家飯田新七一日大阪に赴かんと欲して車中知る所の市會議員某に會す、議員チヨロ鬚を捻くつて揚々身を反らして曰く『や飯田君か、今日は市の用向でナ』故に白切符をひけらかして傍人無きが若し、後

數日新七復大阪に赴かんと欲して停車場に到れば某また其處に在り、赤切符を所持して意氣頗る銷沈、言動甚だ萎微して、恰も大家の旦那の落魄極點に達して女房の實家の食客たりしに異ならず、遙に新七を迎へ見て赧然としてヒヨロ／＼お辭儀をして曰く「之は飯田様でしたか、へー私ですか私は一寸私用で………」と、新七怫然呆れて其面に唾んと欲し、歸つて而して人に語つて曰く「今の役人や議員はどうにもかうにも仕様のない奴ばかりで反吐が出る、官金や公金なら身分不相應にバツバツと遣はふし、自分の金ならケチ／＼して親類朋友の義理をも缺くと云ふ始末、それも好いが人間の相場が買つた切符と一所に高低する様ぢや自治も獨立もあつた話でない、悖徳の餓鬼が寄合つたんぢや京都の前途も何

だか心細くなつて堪らない」と、聞く者憮然。

石黒忠恵電話の效能を知る

矢野二郎は電話の長話を好む男なり、御難相手に立つた者浴後には風を引き夏の夜には蚊に刺されて手足を腫らす、二郎の辯疎に曰く「電話の效能は遠方の人と膝組で緩と話が出来る所に在る、電信や葉書の様にチヨツピリ用事を達せば可いと思ふは未だ文明の利器を解せぬ者だ」と、石黒忠恵電話を架けるや試みて二郎と十數分の長話をなす、曰く「君と膝組で此位話せば少くも唾沫の五六遍は浴けられ



るのだが、今日は電話のお蔭で此災難を免れた、忠慮こゝに至つて始めて電話の効能を知つた。』

兼松房治郎は義勇の紳商なり

兼松房治郎は神戸の紳商にして夙に濠洲貿易を卒先し、老へて勇氣益壯なり、先年事業大に頓坐して殆んど産を破らんとす、房治郎神色自若、此難關に處して毫も進退を失らず、店員一同を會して徐に演説して曰く濠洲貿易は予が生命なり、既往十數年辛酸嘗め來つて事業漸く緒に着きたれども、今や不幸にして此蹉跌に會す、慘は即ち慘なれども是れまた天命の然らしむる所、暫く雌伏して以て再び機の至るを俟たんのみ、

然れ共卿等は少壯有爲の士空しく敗將予に殉じて將來を誤らしむるに忍びず』と、因て慰諭して訣別する所あらんとす、店員感泣して敢て仰ぎ見るものなし、山川勇木當時正金銀行神戸支店長たり、仄に之を聞き、蹶然起つて疾呼して曰く『兼松は義勇の紳商なり、斷じて殺すべからず』と、提身債權者間に斡旋して遂に其事業を再興せしむ。

安田善次郎能く裏面を觀察す

静岡縣の豪農某なるものあり、所有田畑四十餘町歩を賣らんと欲して之て安田善次郎に商る、安田曰く『好し僕はそれを買はふ君乞ふ余の爲に實地の案内をしろ』と、乃ち日を約して静岡縣に赴く、某竊に以爲く、安田

は算數に長けたる男なり、然れども一朝此纏つた土地を見れば、必らず奮つて購求するならんと、因て高に登つて指示してその効能を説く、然れども安田は耳にもせず進んで小作人の家宅を巡廻し、歸つて而して某に言つて曰く『折角拜見はしたが買ふのはお断だ』と、某其案外なるに驚き、重ねて其理由を問へば、安田は笑つて答て曰く『どうも小作人が彼様に贅澤な生活をしてゐては、小作米が滞つて逆も割に合はぬ土地だから、それ故僕は御免を蒙るのだ』と、聞くもの安田が裏面觀察の妙なるに服す。

大倉喜八郎主恩を忘れず

盤々園々丘に據り溪に亘るもの、之を大倉靈南坂頭の居室となす、甲良

創式の大名屋敷は其俵を丘の西北に止めて、南に洋式の美術閣あり、東南千頃の溪には大倉學校の教室軒を連ねて、未來幾百の鳳雛を收容す、觀じ來れば眞に當代の小阿房、滿眼玉を瑩ひて彩光天を衝けども、本是れ北越一民の赤脚に成らざるはなし、一民姓は大倉、名は喜八郎、初め鶴之助と稱して麻布飯倉町の鯉節屋某が丁稚たり期滿ち退ひて魚屋となり、銃砲屋となり、土木負請業者となつて忽ち巨萬の富を重ね、終にあらゆる商工業に關與して日本屈指の紳商となる、渠今業成り名遂げて得意満面錦裳玉食、出入馬車を以てして尙ほ且つ足らざるを憾む、而して渠の舊主鯉節屋に對する、敬禮舊態を改めず、其門を過れば必らず徒步して寒暖を問ひ、日々幾貫、自家用る所の鯉節玉子は、悉く舊主の店より取り

て、常に舊恩萬一の報途となす、聞く者渠が青雲の偶然ならざるに服す。

前田正名と永島松籟の誓約

前田正名日向庄内村の原野を開墾して其業半に垂んとす、而して監督人を得ざるに苦しみ、友人永島松籟（海軍大佐）が閑散に就けるを機として拉して其任に當らしむ、然れども松籟本豪酒家なり、一旦酒を被れば氣焔天を衝て又事務の重んずべきを知らず、乃ち正名松籟を戒めて曰く『足下人夫を役するに長ずれども惜むらくは酒癖あり、足下余を助けて開墾に當らば、請ふ先づ酒を禁ぜよ』と、松籟之に應じて曰く『予の酒を嗜むは夫猶足下の喫煙の如きか、醫師が屢々禁煙を勸むるも未だ廢

せざるに非ずや、足下若し喫煙を禁ぜば予亦謹んで命を可かん』と、二人こゝに於て互に其嗜好を慎むの約をなして俱に供に開墾に従事す。

岡橋治助の蓄財試験

岡橋治助は大阪切つての吝嗇家なり、出ては岡橋銀行の輻朱を争ひ、入つては下女が炭の次ぎ方にまで干渉す、松本重太郎一日從容として治助に揶揄つて曰く『吝嗇も大抵程のあつたものだ、而して君はどこまで慾張る積りかな』と。治助微笑して答て曰く『慾張つた日には五大洲も管のみならずだが、私は只斯うして一生涯にどれ程金の溜るものかを驗してゐるのだ』と、重太郎も開いた口が暫し塞がらざりし。

竹内桂舟犢鼻褌の名畫

紅葉山人追悼會の芝紅葉館に催さるゝや、朝野舊誼の士陸續相會つて潜然として式を了す、別席に入て鯨蛇量を争ひ酒盡きて醒客興の新ならんこと競ふ、座に竹内桂舟あり、筆を強ひられて澁々起つて揚言して曰く『今日は犢鼻褌なら畫くが、絹や紙なら厭だ』と、満堂その言の奇なるに度膽を抜かれて、ウンともスンとも言ふものなし、藤野房次郎隣室に在り、聞て而して之を壯なりとし、倉皇襖を排してそこへ押かけて曰く『ヤ之れや面白い……僕が一番畫ひて貰はふかい』と、乃ち洋服を解ひて赤裸に爲つて犢鼻褌を出す、桂舟こゝに於て毛筆を揮つて馬を褌上

垢染たる所に畫き、署して曰く「臣源桂舟謹寫」と一座愕然。

林董田中家の女將に凹まざる

前外相林董夙に遊藝を好んで通名狹斜の間に鳴る、一夕渠京橋田中屋の待合に浮れて美人を顧みて得意の通を振り廻す、曰く『此間一中節の淀を聴ひたが、文句が能がゝりて「松風の花を薪に吹き添へて」などいふ所は至極高尚で面白い』と氣取るも、満堂聞として些の反響なし、『清ちやん淀ッて何に?』『さうねえ……知らないつてのも極りが悪いけれど』と一寸片隅に潜々問答起る、田中屋の女將側に在り微笑一番董を試みて曰く、『御前それは宇治ぢやありませんか……どうもさうらしい

文句ですから』渠ハツト氣が付いて自ら地理上御近所の間違なるを謝す。

大倉喜八郎釋迦に説法す

大倉喜八郎銃砲賣買に身を起して頗る其道に精通す、一日某集會に臨んで談偶々銃砲に及ぶ。大倉乃ち得意になつて一客に向ひゲベル、ミーヘルの舊式銃より説き起し『南北戦争の遺物は西南事變に命脈を絶つてスナイドルと交送し、日清戦争は又之に代ふるに村田銃の精銳を以てして今日に及ぶ』と因て其改良の日進月歩は終に宇内の最強國を壓するの威力を嘖々す、何ぞ知らん其客は即ち大倉の譽めちぎつた最良銃の明發者村田經芳其人ならんとは。

村井吉兵衛大隈伯を崇敬す

村井吉兵衛は無類の隈伯崇拜者なり、曰く『私は今の元勳のお方にお目にかゝつても、左右仰山なお人やと思やしまへん、けれど大隈伯ばかりはほんまに國家的のえらいお方やと有難ふて自然に頭が下ります』と、而して渠が伯を崇敬するの所以は、第一伯の育英事業に熱心なる事、第二萬里遠來の外賓を優遇する事、第三在留外人に交を深して時々觀花宴遊を共にする事の十年一日も替ならざるに在り、思ふに渠は舊都凋落の間に起つて率先世界的事業に従事せしもの、揮鞭蕭々一躍煙草界の豪傑となり、遠交近攻之を實地に畫きたる往時を追懷して、更に伯が遠交近

親の高邁なるに服せしなり、渠の着眼又善からずや。

西五辻文仲大坂美人を愚弄す

貴族院議員男爵西五辻文仲先年臺南に遊びて銀製鯉魚の彫刻物を得たり、刀法正確刻作緻密にして大さ最も時計の鎖を裝飾するに適當す、文仲乃ち喜んで之を胸間にピカ付かせ、別にアルミ同型の鯉魚一箇僅に三十錢なるもの三打買込んで毫も同行の嗤笑を意とせざるが如く、還つて大阪に豪遊するに當り、侍る所の美人織手銀鯉を捻くつて「オー美しく」と垂涎すれば文仲莞爾「欲しくば取らす」の御前をきめ込み似たもの一を美人の蹠へ投き込めて到る所大阪美人の歓迎を受く、何ぞ知らん頻りに嬉しがる美人此品大枚一箇卅錢の銀メツキならんとは。

に嬉しがる美人此品大枚一箇卅錢の銀メツキならんとは。

梅浦精一水蜜桃を背負込む

梅浦精一、澁澤榮一の北行を送つて上野停車場に向き、發車を待ちわびて起つて前なる水菓子屋を素見せば水蜜桃の一箱今しも蓋を開けたるばかり黄紅澤々甘露皮に透つて其甘さなること譬ふるに物なし、精一乃ち指を以て摘み、一々硬軟を試み將に其良き一箇を擇んで之れを食はんとす、水菓子屋の女房奥より出て、大聲に怒鳴つて曰く「水蜜桃はさう一々指で押しちや不可ません、直き腐敗が出て大きな損になります、何卒其一箱皆買つて下さい」と、精一道理と思ふて終にその一箱を背負ひ込む。

岩谷松平佐野令三に凹まざる

岩谷松平突飛外資輸入策を講じて貿易協會に諤々す、曰く「外資輸入の方便として婦人を海外に輸出するのはどうだ、肢を殺ひて母に食らはしめたと云ふ孝子もあるから、目下の財運を挽回するの一助としては、意氣地なき日本婦人は宜しく奮發して五尺の身を賣るべしぢや、柳は緑花は紅、之を内にしては報本愛國の趣旨に適ひ、之を外にしては一切衆生の煩惱を度す、忠臣となり菩薩となる豈貴からずや」と、佐野令三憤然起立して一喝して曰く「黙れ松平、普天の下王土に非ざるは無く、率土の濱も王濱に非ざるは然し、昭代の天地は妄りに汝の妻孥を鬻ぐをも許

さず、且つや海外の空氣は日本醜業婦の不潔を厭ふて國權爲めに揚らざるの憾あり、兵に曰はずや彼を知らず己を知らざれば百戰百敗すと、何も知らずに饒舌る事は些と慎んで貰ひたい」と、松平顔色なし。

安田善次郎臺灣の甘蔗畑に驚く

安田善次郎臺灣縦貫鐵道全通式に列席するの序を以て同島南部の沃野を巡察す、發するに臨んで窃に以爲く臺灣廣しと雖も半開の孤島のみ、何ぞ我が經營する北海道製麻會社の麻田一千五百町歩の饒々たるに及ばんやと、已にして汽車は廣漠たる原野に出でたり、茫渺一色さながら蒼海を行くが如し、試みに問へば是れ臺灣製糖會社の甘蔗七千町歩に亘るの耕

地なりと云ふ、道の善次郎こゝに至つて愕然茫然復たグウの音も出でず。

正木照藏河豚に惑はさる

日本郵船會社船客課助役正木照藏一下婢を雇ふに、其婢本國長門とあつて頗る取り廻しよく、折々美味なる干魚を炙つて晩餉の膳に添ふ、照藏毎に舌鼓を打つてその高味を賞翫し、毎膳殆んど缺かざるに至る、一日從容として問ふに此魚の何たるを以てすれば、下婢得々として答へて曰く『これは長州で名高い河豚の干魚でございます』と、照藏河豚と聞いて俄に恐怖し、忽ち一喝して曰く「貴様飛んでもない物を喰はした」と、爾來再び口にせず。

濱岡光哲稀代の珍品を知る

濱岡光哲一座の觀音佛を藏して竊に其珍品たるを誇る、故川田小一郎の京都に遊ぶや、偶々此珍あるを聞きて光哲を叩ひて百方其讓與あらんとを求む、然れ共光哲可ず、曰く『之れは是れ小生の秘藏佛也、足下の以て珍とするに適せざるもの、若し足下に適するの珍品あらば、小生誓つて其通知を怠らざるべし』と、小一郎其言を信じて待てど暮せど通知なきこと數閲月、乃ち堪りかねて「珍品如何」の催促狀を發すれば、光哲直ちに返事を認めて曰く『京都商業會議所書記長の室にて發見致したる市原盛宏と申す珍品は、元來内地の製作物には候へ共、近く米國の玉

人に磨かせ候に其質佳良にして金色の光あり、到底京都商業會議所の書記室に埋没せしむる品に之れなく候御思召如何貴意に任せて御返事まで……」小一郎之を奇として早々市原を迎へて日本銀行に入らしめたり。

中村是公後藤新平に知らる

南滿鐵道總裁中村是公初め財務官を以て臺灣民政局に在り、一日稅務に關して時の長官後藤新平の激怒に觸れ、叱咤語激して「切腹しろ」と怒鳴らるゝに至る、是公憤慨措く能はず、直ちに辭職せんと欲して其意を友人祝辰巳に漏らす、辰巳從容として之を慰めて曰く「マア君さう怒らんで辛抱し給へ、後藤は却々面白い男だから」と、是公怒漸く解けて勤

勉益力め、遂に新平に知られて屈指の股肱となる。

竹村良貞細君に窘めらる

帝國通信社長竹村良貞一夕赤坂の旗亭に飲んで藝妓に浮かれて鼻毛時と共に長し、乃ち身腰を据へて纖手の介抱に預らんと欲して偽つて自宅に電話して言へらく「急用が出来て横濱へ行くから今夜は歸へれない」と、肯々以て自ら欺き得たりと爲し、翌日澄して宅に歸へれば細君ニヤリ笑つて迎へ且つ犒つて曰く「嘸お勞れてしたらう、デモマア昨晩は一時過てしたのに能く氣車がございました



つけ子』流石の良貞胸にギツクリ恰も針より太き角の筵に坐るが如し。

杉村甚兵衛善光寺を驚かす

ナムスギムラ

ジンベエ



杉村甚兵衛は東都有数のモスリン商人なり、曩に信州善光寺の建物國寶となるや、甚兵衛同寺に詣つて爲めに若干金を喜捨せんことを請ふ、世話人問ふて曰く『何程お納めになりますか』甚兵衛曰く『餘りお耻かしいから一寸算盤を』と、因て算盤を借りて三珠を擧げて之を示す、世話人私に以爲く三の桁は百か十か、三千圓なら大に助かるが、多分三百圓ならんと、内々氣を揉んで様子

如何と注目すれば、甚兵衛頓て靴を開ひて百圓紙幣で三萬圓を寄附し、別に七千五百圓を出し家族一同の寸志と號して之を納む、世話人驚喜意外に出て、伽藍保存の防火工事を大成す。

大谷嘉兵衛時勢の進運に驚く

大谷嘉兵衛赤脚伊勢を出て奮闘四十餘年、横濱屈指の紳商と呼ばれて今將た六十八才を餞せんとす、明治四十年十一月日本貿易協會の紀念會に臨んで演説して曰く『白駒馳すること迅速にして禿頭蠅の迄るに氣が付かず、憶ひ起す今より四十九年前、余が始めて横濱へ出た時一盃二十四文の蕎麥が、今は上つて三錢五厘、若し夫れ日本音信の速度に至つては

嚮に九十日を費したるもの今は海底電信の爲め僅々十二時間に過ぎざるを、嗚呼前者が直段に於て十四倍の成長を致し、後者が時間に於て百八十分の一の短縮を來すもの、抑誰の力ぞや、時か時か、日月流るゝが如く鬚髮霜既に至つて願て我業の遅々たるを愧づ』と、聞く者皆憮然。

伴野乙彌夢覺て頭の冷なるを覺ふ

日本興業銀行監事伴野乙彌一夕某所に飲んで半宵腕車に扶けられて牛込の家に戻る、車上コク／＼船を漕ひて漫に洋行の愉快を思ふ、已にして轆ゴツリ車門外に止つて夢忽ち覺む、車夫提灯を照して一叫して曰く『ヤ旦那朝子は？』と氣がつけば南無三帽子を失して寒風凜々頭上

毛髮の薄さを感じること更に深し。

相馬哲平忠義の耳を有す



函館の金貸業者相馬哲平は北海道第一の資産家なり、齡七十七に及んで鑠鑠壯者を欺けども耳聾してどこかに間ぬけの所あり、談偶々寄附贈答等の事に及べば曰く『乃公は耳が遠くなつて何を言はれても薩張り解らぬ』と、首を横に振る、然れども手代等若し利足の負け引きを談じ貸出し擔保の價格を云爾すれば聾の哲平直様口を出して押問答を爲し、要領を得ること夥し、識者以て哲平忠義の耳を

有すと爲す。

太田孫次右衛門美人を小兒にす



高田百三十九銀行頭取太田孫次右衛門一夕茶亭に登りて陪する所の美人顔色憔悴たるを勞り、問ふに病症の何者たるを以てすれども美人遠慮して敢て答へず、孫次右衛門即ち通を利かして「解つた夫ではジブテリーだらう」と、叫くや、美人訝つて孫次右衛門の顔を見詰め、更に微笑して、ジブテリーは赤ん坊の病氣……ヒステリーの間違ひぢやないの」と、切り込んだ孫次右衛門ハタと閉口頭を撫

てくいかにも其ヒステリー〜」

柳生一義は巡查より弱し



臺灣銀行頭取柳生一義一日臺北俱樂部に泥酔して、歸途堪へかねて暗中人なき所に放尿す、生憎なる哉査公横町より來りて誰何して之を告發し、以て科料三十錢に處す、一義慙愧之を秘し隠しに隠して、窃に以て仕済したりとなす、居ること數日臺北新聞之を筆して大に其粗暴を戒む、一義の子女早くも其新聞を一讀して哄笑一番一義に揶揄つて曰く「嚴父さんは弱いてすね、巡查

さんに叱しかられて罰金ばつぎんを徴とられたとサ」と、一義赤面私せきめんひそかに威嚴げんの損そんじたるを嘆たんず。

添田壽一損料馬車の嘆



日本興業銀行總裁添田壽一去歲洋行歸りの勢を驅つて天長節の夜會に赴く、英人某の令嬢また請ふて壽一と同行す、初め壽一窃に以爲く日本興業銀行總裁ともある者がまさかに馬車でなくては不體裁だと、因て俄に損料馬車を借り受け、我が物顔に得々嬢と同乗して行將に歸らんとし玄關に至つて聲を噎らして馬車を召へく、會了つて壽一

ども一向何等の反響もなく、乙去り丙往き歸客時と共に去つて檻樓馬車一輛僅に残れるを見る、馭者の曰く「添田の馬車添田の馬車と先刻から呼ぶのは乃公の事かい、日備旦那の苗字などはいつか忘れちやつた」と、壽一流汗淋漓、始めて心付いて嘆息して曰く「斯ういふ時に抱馬車でないと大に困る。」

益田英作の一秒演説

益田英作軀幹圓大且つ英語に巧みにして外人そつち退けの偉丈夫なり、併し往年渠の英國に遊ぶや、倫敦の縉紳爲めに盛宴を開き之を饗應す、英作以爲く、珍客宴に臨む、豈謝辭なからんや、乃公だつても、卓上演

説位は出来る、乃ち起つて満場の紳士諸君！と口を開けば、拍手四方に起り恰も戦時の凱旋將軍を迎ふるに似たり、英作こゝに至つて、煙に巻かれて、グット問へて、自ら言ふ所を知らず、百計窮つて又窮鼠の勇を鼓舞し、絶叫して曰く『アイ、アム、シット、ダウン』（余は着席す）と、ヒヨツコリ座つて額に玉の汗を流す、内外参列の紳士竊に嘲つて以て英作の一秒演説となす。

松方正義カー子ギーの意氣に感ず

侯爵松方正義嘗て海外を漫遊するや米國に到り實業界の泰斗カー子ギーを訪ふ、カーネギー握手終るや否や直に開口一番『私は勉強好きですが、

貴下もソウですか、何でも困難なる事を笑て處分する様でなくては逆も成功しません、夫れには身體の強健が第一ですから私は毎日充分運動します、貴下も運動なさい、私は運動服を進呈しませう』と正義殆んど煙に捲かれんばかりなり、翌朝カー子ギーより直に洋服一着を贈らる、正義始めは戯れと思ひしに意外にも之を實行されたるより益其意氣に感ず。

金原明善心入の進物

金原明善知人を尋ねて贈るに山芋一束を以てす、曰く『之は私の山から出た芋ですが珍しく長いから進上致します』と蓋し渠は静岡縣下の荒野を拓ひて勳績比類なき者、是を以て人々其苦心を聯想して感泣して受く、

而して山芋は原價四十五錢のもの、之を絹布寶玉の進物に比すれば零壞
番ならざらんも、其撰擇の宜を得たると、渠が儉徳を表したるとの價値
は更に之より大なるものあつて存す、某人曰く『進物は志を専とす徒
らに奢侈を事とせば翻つて非禮に陥らん、明善の芋の如きは濁世の一燈
たるに耻ぢず』と、詢に然り。

淺野總一郎細君に窘めらる

淺野總一郎去る頃夫妻相携へて大阪に遊び中の島の旅館花屋に投宿すれ
ば、和田維四郎亦新橋美人に取り巻かれて同家に來泊するに會す、大阪
の新聞誤り傳へて淺野總一郎美人を携へて來阪すと書す、一郎地團太踏

んで憤慨し、口を極めて大阪新聞の粗漏を罵る、細君傍より窘めて曰
く『郎君は平生が平生だから爾う記かれても詮術がありますまい』と總
一郎急所を突かれてギヤフン語なし。

河東田經濟中元の贈物を斥く

河東田經濟富士製紙會社の専務取締役となりて大に
情實の弊を正さんと欲し、自宅の受付に命じて斷じ
て中元の贈物を受く可らずとなす、盆前に至る部下
果して反物、麥酒、果物、菓子、砂糖等の贈物を齎
らし來つて恭しく新任専務の左右に献ぜんことを乞



ふ、受付こゝぞと肩を聳かして『折角ですが主人の嚴命ですから受取れない、お持歸り下さい』と言ふ、部下其意外に驚いて『何卒お臺所の隅へでもお置き下さい』『イヤ成りませぬ』と頑として應ぜず『強て争はゞ電話で主人の出先へ照會します』とあるには流石の面々詮方なくして御苦勞さまにも贈物を持ちかへす。

井上角五郎法螺貝の講釋に感服す

蟹甲將軍井上角五郎嘗て侯爵佐々木高行の昇爵祝に招かれて華族會館に至り、談偶々法螺貝のことに及んで謹んで高行の註疏を聴く、高行咳一咳して講釋して言へらく、『夫れ法螺貝は水陸いづれにも棲んで海を出

て山に登り、洞を出て河に入る、其活動するや雲を召び雨を降らすの不思議あり、之を法螺貝の天昇と云ふ、故に法螺貝に山水幾多の苦行を積んで殼に疵痕多きを貴しとす』と、角五郎傾聽之を久うして其講釋の面白さに感服すれば、人の悪い友人傍より角五郎の背を叩き『序に蟹の甲良の疵痕の多いのは如何です』と、角五郎苦笑して黙々。

尾崎三良得意の手踊

尾崎三良往年京釜鐵道の株式募集の爲め各地を巡回するや到る所有志を招いて盛に御馳走をなす、曰く『京釜鐵道は將來云々』能書百萬陀羅を並べて自ら却て酔を進め興に乗じて起つて得意の手踊をなす、滿堂喝采

鳴りもやまずして頻りに其旨さを賞賛すれば、三良得々遊説圖に當つて容易く募に應じたるものとなす、何ぞ知らん喝采は渠が間ぬけの手踊を囃したるにて半ば返禮の濟みたるを示せしものならんとは。

江崎禮二の焼芋籠城

江崎禮二苦學寫眞術を修めて始めて東京に開店す、資本僅に百八十圓しかも明石屋某より借る所なり、時はれ明治三年維新草々士族は兩刀を帶し平民多くはチヨン鬘を戴ひて舊弊滿城頻々洋流を罵倒す、曰く「寫眞は魔法なり、之を寫さば國家危し」曰く「切支丹バテレンの秘密は寫眞術に籠れり、之を寫す者は三年を出でずして死なん」と、妄語百出、萬

盲相和して大に寫眞を排斥す、こゝを以に禮二店さびれて數月に一客を得ず、薪水用を欠きて食せざるもの三日に及び、偶々知人某なるもの來つて渠を慰め焼芋一錢を買ふて之を侑む、禮二喫膝を拍つて喜んで曰く「我れに食あり天之を授く」と、因て錢若干を某より借りて之を瓶中に貯へ、一食焼芋五厘と定めて半月の飢を凌ぎ、大垣藩士松井喜太郎を説いて資金一千圓を借り、家宅を淺草奥山に構へて寫眞を擴張し、百難を排して遂に今日の盛運を致す。

大塚琢造等伯林の美人に凹まざる

貿易商大塚琢造海外に漫遊して室内裝飾家小林義雄と伯林を徘徊す、偶

く々一美人あり二人に前後して行く、二人相語つて曰く『之は噂に聞く淫
賣婦に相違ない、若し折が有つたら話しかけてみやうぢやないか、そし
て佛語で話して應じたら大塚のもの、英語で話したら小林のものにしや
う』と、約定つて交々談話を試みしも、美人は只ニヤ／＼笑ふて隻語の
應答を與へず、二人失望して『ア、這奴はダメだ』とほざくや、美人な
がしめに二人を見かへりて曰く『妾は日本語がはなせますよ』と、音調
江戸ツ子も跣なり、二人吃驚赤面背に汗して逃出したなり。

浅野總一郎岩崎を煙攻にす

岩崎彌太郎海上大王の餘勢を振つて深川の邸を築くや、隣に浅野セメン

ト工場あり、突々たる幾基の煙突連日雲を吐いてまともに岩崎邸を壓し
さしもの壯殿したゝか煤ぶつて光景爲めに慘澹たり、こゝに於て彌太郎
疔癢玉を踏み破ぶつて工場の敷地を買ひ潰さんとすれば、總一郎は得た
り、附込み滅法高直を吹いて出来ない相談を示し、益々煙突を殖して彌
太郎を煙攻にす。

益田英作攝津大椽を驚かす

益田英作義太夫を談じて數々苦勞人の急所を突く、客歳攝津大椽の歌舞
伎座に出演するや、英作友人を拉して縦横漫評を上下す、攝津歸阪後之
を傳聞して窃に良師を得るの思をなし、常春英作下阪文樂座に臨むを機

として、語を卑らし禮を厚うして切に會見せんことを求む、然れども英作元と攝津に識なし或は人違ならんと疑ふて未だ應ぜず、已にして攝津門人を従へて英作のもとに來り、歌舞伎座出演の藝評能く肯綮に中れるを謝して更に教訓あらんことを乞ふ、英作始めて大椽の大椽たる所以を解し、快哉一番今日しも聽く所の越路及大隅の義太夫を評して諄々數時間をつひや。

大倉喜八郎海外漫遊の一大土産

大倉喜八郎曾て人に語て曰く『私は身體が壯健だが、もう取る年だから西洋の見おさめに巴里の博覽會でも見物して來ませう』と、當時蓋し渠

は還曆を過ぎたり、歸へらば將に隱居して以て餘生を風月に送らんとしたるなり、而して一たび歐洲の地を踏むに六七十才の老人店頭に立て凜々しく働き、ベルツの舊師は齡八十を超へて一回二百圓の診察料を取る、こゝに於て渠は奮然若かへつて曰く『ナンノ六十や七十で老ひ惚てたまるものか』と、終に隱居を思ひ止めて歸朝後益々商業を勵む、之を喜八郎海外漫遊の一大土産とす。

戸次兵吉外人に取巻かる

横濱正金銀行取締役戸次兵吉、日露戰爭の際九連城戰捷の公報に接して歡喜自ら禁ずる能はず、フラーリ銀行を出て、獨り竊にオリエンタルホテ

ルに赴けば、そこには外人既に團欒して、頻りに日本軍の勇敢を稱し、兵吉の來るを見かけて起つて一番「お目出度う」を喰らはす、曰く「日本人の貴方が見えたから、一つ盛んな祝宴を開きませう」と、酒を呼び料理を命じ、十數の外人卓を圍んで日本萬歳を三唱し、三鞭のブロージツトに兵吉の健康までも祝して百方御世辭を並ぶ、兵吉乃ち悦に入つてへッレケに酔へば外人時分は好しと一時に起つて兵吉を取巻き片言交りの日本語異口同音に「戸次さん御馳走さま」言下右向き左廻れの縦隊を形づくつてスタ／＼牀を蹴つて去る、兵吉こゝに至つて酔も醒めて一盃食はされたるを覺たれ共、しかも亦如何ともする能はず、溢々數十圓の勘定を拂つてブツ／＼呟して歸る。

服部金太郎立志の由來

服部金太郎幼にして家貧しく、父は露店を開きて僅に其口を糊するに過ぎず、霖雨日久しく續きて憂愁日を空ふすると屢々なりき、金太郎亦從て早く出でて、時計屋の小僧たり、晝は店務に従ひ夜は小閑を得て漢學者の許に通ひ備に苦學す、四書を読むに至りて之を購ふの資を得ず、行て父に乞ふ、書價大枚二十錢のみ、父曰く乃公露店を街頭に張るもの終日而して得る所僅に十有餘錢、以て爾が求に應ずるに足らずと、金太郎悄然として主家に歸り深く金の尊さを思ひ痛く自己の不遇を嘆じ、暗涙襟を濡ほす、獨語して曰く嗚呼金なる哉金なる哉、之れ以て積まざるべか

らずと時に歳十七、即ち慨然として志を立て致々として倦まず、遂に日本の時計王となるに至る。

澁澤榮一菊地大麓等を買戻す

菊地大麓外山正一林董等の七士曾て幕府の撰拔を受けて歐洲に留學す、既にして維新革命の事あり、幕府大政を奉還して將軍水戸に謹慎し、海外留學の士學資の供給を絶つ、學ばん乎衣食すらも支へず、歸へらん乎船賃の出る所なし、閉口仕つて獨逸のロイド會社に嘆願し、荷爲換同様運賃先拂を以て軀體を



日本に運送することを約す、偶々澁澤榮一西洋に在り彼等の窮困を憫んで爲めに路用の算段をなし、遂に七士をロイド會社より買戻して領事館に引取つたり、然れ共館室廣からずして七士を待つ寝床なく、之を食堂にゴロ寝させて以て一夜を明かさしめんとす、正一等怒て曰く「鷹は饑へても穂を摘まず、我輩豈豚の如く遇せらるゝに忍びんや」と、榮一大喝して曰く「豚ならば尙可なり、余若し來らずんば公等は荷物と爲つて船底に積まれしならん」と、正一等顔色なし。

岩下清周廣告に巧みなり

大谷本願寺の財政紊亂は人の知る所、東西の銀行大に警戒して之に向つ

て其貸出を中止したれ共、獨り大阪北濱銀行専務取締役岩下清周は進んで巨額の資金を貸出したたり、曰く『法主一席の親論は容易に百萬金の財施を致すに足る、眞宗の榮ゆる間は貸出銀行毫も損失を被る事無けん』と、果然その貸金は何等の間違もなく、隨て同宗二百餘萬の門徒は大阪北濱銀行あるを知つて、窃に門跡維持の恩人と喜び、爺婆亦その臍くり金を預けて頓に同行を賑はす。

田口卯吉井上勝に手古摺る

故田口卯吉往年兩毛鐵道を企て、鐵道局長井上勝に待つ所少からず、然れども井上は名だたるひねくれやなり、右と言へば左と言ひ後と言へば

前と言ひ、滅法捏くつて手古でも棒でも追付かず、卯吉乃ち閉口頓首して己を枉げて厭々御馳走政畧を用るの意あり、漸く以て精養軒へ請待仕らんと欲す、井上早くも之を嗅付けて而うしていやにひねくつて曰く『乃公は西洋料理は嫌いだよ』と、卯吉益々手古摺つて譯知り先生奈良原繁に相談し、僅に其智恵を借りて日本料理を饗應し、多數の藝者に包圍かせてエンヤラ、ヤット御機嫌を取る。井上今や亡し、定めし冥土で田口と懷舊談をなすならん。

益田太郎可惜通人の器量を下ぐ

益田太郎夙に狹斜を跋渉して艶風紅裙を吹き靡け、因て以て數々友人を

穢弄す、磯村豊太郎、犬塚信太郎の二人、頻に忌々しがつて窃に復讐する所あらんと欲し、事を構へて太郎に函根の温泉行を勸む、太郎察せず早速二ツ返事で供に俱に函根の福住へ行く、チラと見る別間に三藝妓あつて他を憚つて狐鼠々々奥の方へ隠れたるを、太郎莞爾として二人を顧りみて「見たかく」と尋ねれども二人は素頓狂に「何を」と反問して一向氣が付かざるものゝ如し、太郎大に喜んで以て一番艶腕を振はんと欲し、言下番頭を召んで三妓の誰たるを問へば、番頭天窓を搔き、躊躇して且つ曰く「エー御覧になつたら據ございませんが、彼は新橋のお駒さんに才三さんに丈八さんで………實は内證で湯治に來たのだから誰殿にも知れない様にして呉れとの達てのお頼み、私の口から漏れたとあつ

ては洵に申譯がございませんから萬望此儘も見遁しを」と、ペコ／＼詫つて去る、太郎横手を拍つて快哉を三呼し「爾ふいふ譯なら猶更面白い」と、忽ち持病の横紙主義を發揮してツカ／＼三妓の隠家へ踏込み「アラまあ旦那」と厭がる美人を狩立來つて無理やり座敷に侍らしむ、枯木忽にして花を開き瘠山香を送つて春風細腰を吹く、太郎愈々得意の鼻を蠢つかして大に美人を生擒るの手腕を誇り、氣煽丹公を吹き飛ばし揚々焉として自ら此行の成功を談ず、美人に反忠めかす者あり態とらしく太郎に告げて曰く「貴郎堪忍してよ………これは皆んな磯村さんと犬塚さんの悪戯だわ」と、流石の太郎こゝに至つてギャフンと鼻を打折られ、始めて一盃喰はされたるを悟つて可惜通人の器量を下ぐ。

松方幸次郎美人に奪めらる



神戸川崎造船所の社長松方幸次郎は花柳の大通にして、其遊び振また滅法ずぼぬけなり、渠の東上するや新柳の紅裙覃食壺醬して之を待合に迎へ、纏頭を投込んで各々長夜の飲を辭せずと云ふ、而して松方癖あり毎に雛妓を追ひ廻し之に裸踊の總まくりを演らせて、自ら以て得たりとなす、老妓等懇懇して相議して曰く『松方さんは程が好くつて遊びが面白く、そうしてよく切れるから、あんな好い方は又とないが、雛妓を裸體にするのが一つの大瑕だわ』と、以て窃に渠を懲戒する

の策を講ず、一夜渠の新橋某待合に顯はるゝや、數名の紅裙時こそ來れと、推參以て渠を胴揚にし、上衣を脱がせ、胸服を奪ひ、股引を捲上げ、渠が毎々雛妓に仕向ける所を反行して以て赤裸々たる一個の裸紳士となし、唄ふて曰く『裸で道中がなるものか』と、松方流石に閉口して漸う詫びて衣服を取戻す、己惚れて曰く『チョツ之れぢやア女除の方法を變へなけりやならぬ』

安藤謙介勝安房を凹ます

安藤謙介は徳川時代の洋學生にしてしかも當時の高襟なり、勝安房こゝを以て望を屬し、私に之を愛して自家の寫眞を贈て謙介外遊の驢となし、

尙ほ彼の留學中書を送りしとあり謙介歸朝後安房を叩きて大に其厚志を謝すれば安房は却て知らざるものゝ如く『ハア安藤謙介さんチウ人は日本に在ッたかチー』と、以て例の調子で冷したり、謙介輒ち躍起となつて怒つて曰く『足下余に寫眞を贈つて百方余を勵まし、且つ留學中も手書を書せながら、今に及んで知らざる爲するは何事ぞ、由來東洋流の豪傑は這般筆法を振ふ僻があつてならぬ』と、斬込んだるには、流石の安房も、頭を押へて『之は爺一本參つた哩』

小川錮吉船中にチヨンキナを誑ふ

小川錮吉嘗て日本郵船會社の倫敦支店長として其任に赴くや、同乗の船

客長途の無聊に苦んで相會して隱藝を競争す、錮吉また與りたれ共無藝大食何等の出品なきに閉口したるが、忽ち新柳二橋の美形が座興を思ひ起して起ッてチヨンキナを演ず、手振り進退ダラシなくして間のぬけ加減名狀すべからざれ共、外人の眼には却て興味ありしと見へて喝采滿絃、遂に錮吉を綽名してジヨン、キナ君と稱するに至る。

小川錮吉吉武誠一郎料理屋に嫌はる

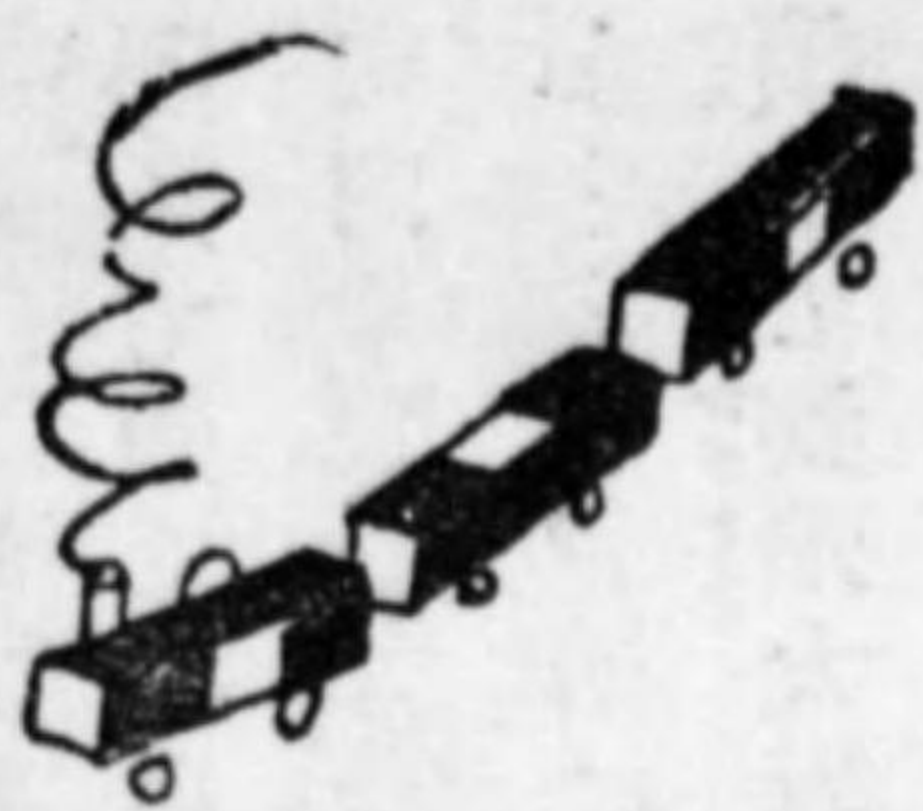
芳香馥郁清光虚に憑て來るもの之を不忍長醜亭となす、惟今の割烹岡田の前身にして韵人文客の好んで會飲せし所なり、某年某月の朔絹帽絨服の二縉士來つて一小酌を催す、亭の下婢密に推測すらく、此客蓋槐門

の貴公子、早晚歌妓を聘て大盛を極るならんと、則ち朋婢に耳語して優遇至らざる所なし、然れども二縉士毫も關せざるもの、如く、一本三品の膳も只是れ義理一遍の看板、爛冷め刺身乾くも顧みずして碁を召んで夢中に對局す、下婢側に焦込んで『貴郎マアお一盞』と侑むれば『オソト其手は桑名の焼蛤』と逃げ、疊みかけて『置酌に致します』と強ゆれば『つぐならばねかけろ』と洒落れ『どう遊ばしましたエ』と訝れば『劫したのだ』と説明し『お猪口子子が生きます』と注意すれば『今の内しちやうを釣れ』と受け流して一局又一局、下手の横好き更に際限なくしていつしか半夜に垂とす、こゝに於て下婢は不平を鳴らし帳場は座敷泣せと呟して冷罵更に襖越に聞ゆれば二縉士漸う悟つて飯を搔込んで

て歸へる、蓋し二縉士とは平生基敵と言はるゝ日本郵船會社の小川鉞吉と故吉武誠一郎にして、谷中會葬の歸途圖らずこゝに立寄て下婢等に厭がられしなり。

高島嘉右衛門易談に浮かさる

易談を讀んで離編三び斷つ、聖人遠く去つて倂近く高島嘉右衛門の易談に映る、渠や嘗て事に因て國府津へ赴かんと欲し、一等列車に搭じて窃に、着驛の遲さを怨む、願れば車中に石黒軍醫總監あり、ヤアとばかりに同乗を喜んで談忽ち周易の事に及ぶ、周易は高島第二の食物



なり、論難攻撃互に我を忘れて頭上いつしか洋燈を點ずるに至る、總監問ふて曰く『高島君は何處まで行かれますか？』高島俄かに氣が付いて答て曰く『ハア私は國府津まで行くので……、イヤもう濱松を越しましたか……、構はない、寧ろ談の盡る所まで乗りませう』と、平然易談を續けて到頭大坂まで行く。

大江卓岩崎彌之助の向を張る

大江卓一日細君を出し抜いて單行して歌舞伎座を見物す、願れば隣棧敷は掃除清淨に、毛氈火鉢化粧美しくして、人待顔なるが如し、以爲く之れは必然どこのか華族が來る席ならんと、少焉あつて外廊ガタバシ出方

叫び茶屋丁走り、憮然團十郎の樂屋入に等しき騒して其處へ案内されたるは卓が義弟岩崎彌之助也、ヤアとばかりに不測の邂逅を祝すれば茶屋丁は側から立派な縮緬の座蒲團を進めて彌之助を優遇す、こゝに於て卓心平かならずして窃に丁を召んで詰責して曰く『乃公にはこんなケチな蒲團を宛行つて何故岩崎には縮緬の蒲團を出すのだ』と、丁頭を搔て恐入て曰く『ヘイ岩崎さんは特別で……』『ナニ特別、夫は多分茶代を澤山出すのだらう』『ヘイ、實はナオ茶代が百圓と極つて居りますから別段に氣を注げ升ので』と、卓冷に笑ふて曰く『ナンダ只ツた百圓か乃公は二百圓やるからものと立派な蒲團を持って來いと、言下鞆を開き百圓東二箇を投出して縮緬蒲團二枚を取寄せ、漸く溜飲を下げて曰く『ア、

之れて義兄の顔が立つた」

村井弦齋武藤山治の成功を豫知す

官吏と名が附けば備吏も髭を生して平民を叱り、會社へ勤めれば給仕も時計を下て一科の紳士を氣取る、弊履短褐胸裏に大業を畫いて眞面目に其業を營む者、宅には千金の茶釜有れども、往々備吏や給仕に冷遇されて官衙と會社に可惜時間を徒費する事あり、武藤山治は工業界の手腕家なり、鐘淵紡績會社に入るの初め、早くも如上の弊風を察して倉皇筆を振つて一箇の訓戒を掲ぐ、曰く『當社へ來る人は皆なお客様なり、いかなる人と雖も叮嚀に應接すべし』と、村井弦齋偶之を一見して退いて人

に語つて曰く『後世恐るべし、此掲示を書いた者は必らず他日の成功者ならん』と果然山治は先づ鐘紡を整理しメキメキ出世して遂に今日の名を成すに至る。

六田黒重五郎旨々養豚論に乗せらる

大田黒重五郎夙に養豚事業の有益なるを思ふて頻りに其能書を振廻す、一日養豚業者某なるものあり、來つて面會を求め喋々養豚國益論を唱へて一臂の力を借らん事を乞ふ、曰く『僕は今種豚改良を心掛けて模範養豚所を根岸の金杉に設けてゐる、次の日曜に來て見給



へ、立派な純良種豚が六頭飼つてあります、場所は川端白杉政愛さんの裏手で、すぐに分ると、重五郎こいつ面白いといつか圖に乗つて自分の養豚論を噴々し「さう熱心なら君奮發して大にやるべし」と勵ませば某は徐々靴を押ッ開ひて一冊の奉加帳を取出し「貴公も思召があらば何がしか御寄附下さい」と、因て益田、白杉等の賛成した由を語る、重五郎愈々疑はずして直ちに若干金を與へ、次の日曜を待ちかねて彼を尋ねれば、そこには養豚所のよの字もなし、若しやと思ふて御院殿から三河島まで探し、ムザムザ半日を費したれども終に見當らずして旨々騙されたるを心付く、嘆じて曰く「君子は欺くに道を以てすと、嗚呼彼奴も亦巧い哉」

天野爲之小學校長に及ばず

法學博士天野爲之は知名の教育家にして又日本一の經濟學者なり、言唾沫と爲つて散つて幾多の人材を生ず、渠に末女あり、漸う十許歳にして毎日番町學校へ通ひ、師に仕へて謹嚴他に絶し、深く校長丹所啓行を慕ふ、其母戯れに問ふて曰く「お前さんは校長先生と宅の父上と孰がゑらいとお思ひだ？」末女冷に笑つて答て曰く「それは母様解りさつてます、逆も較ものになるものですか」母の曰く「比較ものにならないつて、どう比較ものにならないの？」末女乃ち眞面目になつて可愛らしい唇を翫へして曰く「アラまだ解らないのそれは校長先生の方がズ——ツトゑ

らいに定つてゐるぢやありませんか』

大倉桑馬能く部下を撫す

大倉桑馬は大倉組の大黒柱なり、兩親を敬ひ細君を愛し又能く部下を勞はつて往々他の出來ない藝を演る、遇部下に近眼の一技師一日執務中誤て眼鏡を壞す、桑馬こゝに於て自から掛ける所の金縁眼鏡を脱つて之に與へて曰く『君之を進げるから掛け給へ』と、技師満悦して受けて之を見れば玉瑩に縁太くして價少くも十數圓の代物なり、乃ち過分の恩賜なるを思ふて再三辭退すれば、桑馬莞爾として之に言つて曰く『君さう遠慮しては不可い、僕は何時でも買へる身だ、君心配しないで掛け給へ、

勉強家の君に掛けられると、全く眼鏡が喜びます』と、渠が大黒柱たるの因縁以て窺ふを得べし。

大谷嘉兵衛の鼻

大谷嘉兵衛製茶鑑別の技能を以て夙に日本第一の譽あり、往年農商務省の製茶品評會を企つるや各地の茶聖相集て製茶の品質を嘖々す、偶々剽輕漢あつて曰く『大谷君鑑識神の如しとは平生耳にする所なるが、思ふに其能力は鼻七分目二分手一分と云ふ見當ならん、どうです大谷君、目隠をして茶を嗅ぎ分けて御覽なさらぬか』と嘉兵衛美髯の間に莞爾愛嬌を洩して曰く『左様、私にも其割合は分らぬから、一番やつてみます

か子』と、自ら手拭を取て目隠をなし、諸國の製茶を擱て嗅て而して鑑定を下すに、宇治、狭山、伊勢、駿河、一々産地と等級とを指摘して些の誤謬ある事を見ず、大谷嘉兵衛の鼻之より天下に高し。

五代龍作の至孝

五代友厚不世出の才を抱いて明治の實業を經營し、一と度阿波の藍業に敗れて憾を吞んで死す、義子龍作後を承けて負債山の如く、纔に羽前尾猿澤鑛山に楯籠つて汲々其償却を勉む。某人氣の毒がつて諫めて曰く『彼の借金はナニモ君のした譯ではなし、先考もあれ程の人であつたから、今が今其金を返へせと催促する者もあるまい、だからそんなに愚正

直にしなくツても好いではないか』と、龍作涕泣して謝して曰く『故考は初めから借金を踏み倒して一生の快を取らんとせし者に非ず、語に曰く『死に事ふるは生に事るが如し』と、余今考の家を繼ぐ、焉んぞ其志を繼がざるべけんや、經に曰く『謹レ身節レ用以養ニ父母』と、余は我が道を行ふて以て考に事へんと欲するのみ、催促の有無は余れの關する所に非ず』と、某人顧みて赧然。

雨宮敬次郎座右の銘

故雨宮敬次郎數々失敗すれども意氣毫も銷耗せず、或人羨んで奥義を問へば曰く『手に名師あり是を以て然り、敢て吾子に傳へん』と乃ち願み

て座右の銘なるものを示す、見來れば是れぞ一也川柳の名句
つまらぬと云ふは小さいさな智恵袋

田中館愛橋満城の丁稚を驚かす



温顔快舌好んで威儀を修めざるもの、之を理學博士
の田中館愛橋となす、渠久しく大學の講座を受持つ
て、初老に及んで自轉車の趣味を解し、切々と之を
乗習つて往々同學杏林俱樂部の少壯學者をへちやま
カス、某年某月帝都に祝捷の事あり、満城國旗を掲
げて國家の萬歳を祝す、忽ち見る銀座街頭塵を蹴立て、電車と競走する

の自轉車乗あるを、丁稚か丁稚に非ず、脚夫か脚夫に非ず、隆然伏行、
洋装 絹帽を冠つて萌黄の風呂敷包を引ッ背負ひたるは、駱駝の化物に
非ざれば佝僂のポンチ繪なり、沿道兩側の丁稚等手を拍て其圖の滑稽な
るを笑ふ、某店の主管之を知るものあり、低聲叱咤して言つて曰く「お
前達さう笑つちや不可い、彼は大學の田中館博士だぞ」と、丁稚驚愕、
こゝに於て翻つて博士の仙腸を評判す。

木村利右衛門覺えず圍碁に長ず

木村利右衛門往年手代の夜遊びに苦しみ、碁盤六面買つて連宵烏鷲を戦
はす、以爲く圍碁弊なきに非ざれども博奕や藝妓買ひには勝れりと、自

ら其群そのぐんに入いて稽古けいこす、蓋けだし渠かれが方圓社ほうえん二段にんじやうの免狀めんじやうを得えたるは此し修業しゆげふの致ちす所しよにして渠かれに於おて毫がうも恭客きやくとなるの希望きぼうありしに非あらざる也。

梅浦精一隱藝の出端を失ふ

梅浦精一うめうらせいは眞面目まじめの一紳士しんしなり、曩さきに奇態きたいの流行りうかうを來きたして、遊藝いうげいを以もつて紳士しんしの必要ひつえう條件てうけんとなすや、精一つちく熟己おのれが無藝むげいを嘆たんじて、師匠しやうを四ッ谷やの宅たくへ聘まねひて秘密ひみつにしん内の稽古けいこをなす、偶たま矢野やの二郎事にらうじに依よつて精一せいを訪問ほうもんし、仄はのかに主人しゆじんが稽古けいこの鑼聲だらこゑを漏聞もれきいて私ひそかに其腰そのこしを折をらんことを恐れ、其儘そのま去さるに臨のぞんで取次とりつぎの下女げぢよを戒いましむるに「今日けふ僕わしの來きた事ことを旦那だんなに云いふな」の一言げんを以もつてす、後數月のちすうげつ精一せい某所たふしよの宴會えんかいに臨のぞんで二郎にらうに邂逅かいごうし、心

密ひそかに平素へいその眞面目まじめを破やぶつて、岡本おかもと淨瑠璃じやうるりの粹いさな咽喉のんどを嚙くはさんと欲ほつす、二郎にらうニタリ笑わらつて精一せいを顧かへりみて曰いはく「どうです梅浦君うめうらくん、しん内ないのお稽古けいこは出來できましたかネ」と、精一せい不意ふいを喰くらつてギョツと驚おどろき到頭たうとう隱藝かくしげいの出端だしはを失うしなつて己おのむ。

木村德衛伯林に米搗蟲と化る

醫學博士いがくはかせ木村德衛むらとくゑ往年わうねん歐洲おうしやうに遊あそんで、伯林ベルリン醫科大學いこくわだいがく教授けうじゆの某大博士ぼうだいはかせを訪とひ、玄關げんくわんに到いたつて恭うやしく刺しを通つうずれば、一漢出いっかんて迎むかへて此方こちらへと案内あんないし、客堂きやくだうへ通とほして去さつて復來またきたつて一書齋しよさいに案内あんないす、如此かくのごとくすること前後ぜんご數回すうかいに及およんで尙末しやうまだ大博士だいはかせ然ぜんたる先生せんせいを見る能あたはず、德衛とくゑこゝに於おて窃ひそかに以もつて

く、此漢必定當家の下僕、巧に余を操縦て以て賄賂を促すや疑ふべからずと、乃ち金貨若干を衣囊より取つて之を與ふれば、其漢屹然眼を瞋して疾視して曰く『底事ぞ遠來の珍客！予こそは伯林大學の教授を辱ふする某也……』と、南無三シマツタ德衛、顔から火の出る思をなしてベコ／＼お辭儀の米搗鉢と化する。

磯村豊太郎澄して黒人車に乗る

三井物産會社倫敦支店長磯村豊太郎先年米國へ出かけて初めて紐育の聯絡電車に乗る、見來れば乗客肩摩して汗臭殆ど鼻持もならず、只後方の一車は空閑隻客なくして漫に清風の入るに任す、渠乃ち素早く之に乗り

かへて一車買切の贅澤を氣取り、チンと澄して悠々幾英里を過れば、隣車の乗客渠を目して頻々冷笑を洩らす、何んぞ知らん渠が一科上等車の積りて得意に乗つたる車は、白哲人種が穢多とも見做せる黒奴の乗用に設けしものならんとは、磯村車を降りて謂を聞けば所携の毛布顔と共に赤し。

廣瀬源三郎の生命貯蓄法

廣瀬源三郎往年清國渡航の際、同航青年を集めて言つて曰く『諸君は修學旅行の愉快且つ有望の途に在るもの、僕乞ふ謹んで成功請合の韜略を献ぜん、他なし、是れ諸君が若い時は二度ない底の金言を害用して以て

暴飲暴食を敢てするの無謀を戒むるに在り、攝生は無病長壽を迎へ、無病長壽は百事の成功を來す、金錢の貯蓄許りが大切なるに非ず、生命を貯蓄し置くこそ肝要ならめ』云々と、聽者感服して稱して以て廣瀬の生命貯蓄法となす。

田邊貞吉謠曲に浮かさる

田邊貞吉は謠曲を以て御座敷藝の白眉と稱せらる、渠元觀世流を慕ひて切差幾年、聲音美ならずと雖もしかも老功、抑揚宜きを得て最も俊寛、景清等の悲曲に長ず、一夜事故あり倉皇綱曳腕車に乗つて大阪京町節を驅る、市井間として街頭影清く、車聲轟々、恰も潮風波を激して巖に碎

けて飛んで散亂するの趣あり、こゝに於て渠心躍り氣動ひて、覺えず俊寛足摺の一曲を謠ふ、交番の巡查渠を呼び止めて制止すらく『夜間往來て謠曲を謠つちや不可ん』貞吉自ら知らずして訝つて曰く『誰が謠曲を謠ふたですか？』とぼけちや困る、今貴公が大聲で謠ふたぢやないか』貞吉漸う心付ひて謝して曰く『成程さう仰しやれば私が謠ふたのです、ツイ夢中に爲つて………何卒御免』と、只管詫つて早々に逃ぐ。

益田太郎犬塚信太郎を弄ぶ

益田太郎は頗る滑稽諧謔に富み、奇智湧くが如し、一日三井物産會社香港支店長犬塚信太郎を濱町の岡田屋に招き、落語家某に旨を含めて製糖

會社の販賣係塚本と稱して犬塚に紹介す、信太郎襟を正して『毎度御會社の御引立に預ります』など、禮を述べて慰勸到らざるなし、同席の磯村豊太郎お臍で茶が湧くも此處ぞと我慢すれば益田はシラを切つて砂糖の近況を談ず、酒三行にて太郎「オイ塚本君何か隠し藝をやらぬか」と勸むるに、席を離れて得意の落語を演ずれば犬塚始めて益田に乘せられたるを覺り、舌鼓を鳴らしながらヤア此奴一杯喰はされた……

水野幸吉恩人の妻君を忘る

水野幸吉先年西洋から歸つて久し振にて恩人井上勝之助を訪ふ、偶井上邸に在らず夫人また變手古にして往時の愛想好きに似ず、幸吉乃ち不平

タラ／＼去つて窃に奥さん交迭の變ありしを疑ひ、以て大岡育造に質す、育造曰く『イヤ變りはない、依然昔の如才ない細君だ』と、幸吉益々變になつて内々見忘れられたるを憤懣し、再び井上を尋ねて大に怨を言んとす、忽ち見る確に見覺のある昔ながらの細君奥から出て來て反對に怨を述べて曰く『水野さん貴下はマア甚い事、妾を忘れて仕舞つて大山(綱介)の奥さんと間違へてゐらつしやるのですもの、憎くらし』と、幸吉ギヤフンと參つて又一言もなし。

益田孝三錢に窮す

益田孝近來品川御殿山の自邸より三井同族會監理部へ出勤するに電車に

て通ふと多し、某日例の如く電車に投じて悠然新聞紙を繙き、暫くして切符を買はんと欲し、ポケットを探すに錢入れなし、コはシマツタリと百方探すも見當らず、全く家に忘れたるとに心付たるも如何ともすべからず、四苦八苦する内偶々隣席の婦人之を見兼ねて失禮ながら紙入御失念と見受けませんが、妾立替て差上げましやうと三錢を出せば、益田は難有御座りますが知らぬ方に借りる譯にも参りませんと辭退し、婦人はナニ決して御心配には及びませんと勸むるに、車掌は、旦那郵便切手を持ちありませんかと尋ぬるにぞフムソ一だあるく、其れなら其切手を御婦人にお上げなすつては如何ですとの仲裁に、益田はホット一息付き漸く無賃乗車の罪は免れたり。

鍵富三作鐵拳を揮つて金庫を碎く



新潟の紳商鍵富三作初め家貧うして資本を刈部喜平に借る、其穀商を營むに當つて復資を喜平に仰がんと欲し、従容として喜平を訪ふ、喜平迎へ見て懸感一番冷言して曰く『野郎また金をせびりに來よつたな』と、三作勃然として喜平を引据へ螺の様な鐵拳を固めて散々其頭を擲る、喜平痛苦に堪へず悲鳴を擧げて『金は貸すから免して呉れ』と哀叫す、然れども三作可ず更に一拳を加へて悠然疊を蹴つて去る、家に歸るの後嘆じて曰く『ア、矢ッ張

り擲らずに金を借りた方がよかつた」と、看すく儲かる代物を逸して自ら其短氣なるを悔ゆ。

石崎政藏壯士を泣かしむ

石崎政藏一日壯士の訪問に會して、迎へて其來意を問ふ、壯士曰く「我輩は國家の爲めに遠大の意見を有する者だが、目下窮する事があるのてお見かけ申して御無心に參つた、恐縮だが仕込杖をお預けするから十圓貸して呉れ給へ」と、政藏徐に之に謂つて曰く「私も随分艱難苦勞した男で、道具屋でしくじり、仲買で失敗した時分は蚊帳が無くて風呂敷を被つて寝た事もある、併しながら私はいくら窮しても、自分が意氣地の

無い爲めに、國家を看板にして金策をした事は曾てない、貴公は正に國家の爲めに難儀してござらうが、それを言ひ立てるのはもうお廢止なさい、私は貴公の前途の爲めに御異見申す」と、壯士慙愧して語なく、只涕涙の滂沱たるを見る。

故鳩山和夫等大根の新語を製造す

故鳩山和夫初め眞島藩の貢進生を以て大學南校に在り、小村壽太郎、菊地武夫、岡村輝彦、松井直吉、原口要、齋藤修一郎、清水彦五郎、中山寛六郎等と舍を同らして無暗に氣焔を鬪はす、一夕彼等言論に耽りて、頻りに空腹を覺え、互に錢を出合つて何かを煮て食はふと相談し、遂に

一番廉い大根を買つて煮て而うしてした、か之を食ふ、翌日彼等は氣重く、稽古をずるけんと欲して銘々虚病をつかつて醫者を欺き以て一室同盟の休業をなす、之より大根の一語、虚病の符調となつて満校に行はれ、今でも同窓間に記憶せられて時々大笑になる。

渡邊嘉一圍碁の助言權を有す

工學博士渡邊嘉一は圍碁を嗜んで策門一派の名手たり、未延道成、小川鉦吉また同門横好の最手株たるを以て、折々會して烏鷺を闘はす、由來手談に助言は法度なり、犯す者は斧鉞も辭すべからず、然れども嘉一は一門の名手也、此仁だけは特待せざるを得ずと、同人相議して終に嘉一

へ助言の特權を許す、蓋し嘉一の助言は岡目の效能爪の垢程もなきに由る、以て渠が斯門の大名手たるを知るべし。

齋藤實女軍に擒にせらる



海軍大臣齋藤實は海國無双の棒鱈なり、三菱幹部の人々新橋花月に招待會を開いて盛に渠を御馳走す、岩崎久彌竊に豊川良平に謂つて曰く「大臣は稀代の飲み抜け、終宵酒に浸つて酒蛙々々眞面々々到底我々の敵に非ず、之を如何せば可ならん？」良平答へず老妓お須磨を麾ひて聲を低うして謀を問ふ、お須磨ニコリ笑つて胸